

あら い ばら いし ぎょう い せき
新 井 原・石 行 遺 跡

1999. 3

長野県飯田市教育委員会

あら い ばら いし ぎょう い せき
新 井 原・石 行 遺 跡

1999. 3

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市の北部座光寺の地籍一帯は、古代以降、長野県史跡高岡1号古墳をはじめとする古墳が多く築かれ、又、古代伊那郡衙がおかれるなど、政治・経済・文化の中心的役割を果たした地域である。名刹元善光寺もここにある。

新井原・石行遺跡は、縄文時代草創期まで遡ることが知られている。縄文時代・古墳時代・平安時代には集落が、又、古墳時代・平安時代以降は墓が営まれている。特に、古墳時代は、飯田・下伊那を代表する古墳密集地帯の一つとなっている。

今回、増加する電力需要に対応し、安定供給を図る目的で、送電線の鉄塔建設及び工事用道路建設にかかわって本調査が実施された。

遺跡の時代は、縄文時代早期・中期、古墳時代、平安時代、中世前半と想像される。又、調査された遺構は、竪穴住居址・火葬墓・土葬墓等である。そして、本調査により、古墳時代や平安時代の人々の暮らしぶりやその方達の墓のたたずまい、特に、平安時代の墓には、副葬品としての灰釉陶器の優品が納められていることが判然とした。そして何より、奈良時代から平安時代にかけて、当時の人々の信仰を集めたであろう、鍍金の押出仏が出土したことは望外の喜びである。

今、それらの事実が、この一冊にまとめられて発刊の運びとなったことは、誠にありがたく意義深いことである。

本書が、今後広く多くの人々のこの道の研究に資することになれば幸いである。

末尾になってしまったが、本調査に携わっていただいた皆様方、並びに、本書刊行にご盡力いただいた方々に深甚なる感謝を申し上げ、序とする。

平成11年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本書は送電線鉄塔ならびに工事用道路建設に先立って実施された、飯田市座光寺新井原・石行遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、中部電力株式会社飯田支社からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成9・10年度に現地作業、平成10年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影・遺物実測・遺物写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。また、金属器の保存処理を（財）山梨文化財研究所に委託実施した。
5. 本遺跡はこれまで新井原遺跡と石行遺跡とに分けられていたが、昭和63～平成9年度に実施した市内遺跡詳細分布調査の結果、一つの遺跡であるとされ、新井原・石行遺跡となった。発掘作業・整理作業に当たり、遺跡略号A R Bを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である4809-1を略号に統けて付した。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。竪穴住居址・竪穴-S B、溝址・溝状址-S D、集石墓・集石-S I、土葬墓・火葬墓・馬墓・土坑-S K、その他の遺構-S X
7. 本書の記載順は遺構別を優先し、竪穴住居址についてはさらに時期別とした。遺構図は遺構観察表と併せ挿図とした。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』1996年版の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行なった。
10. 本書の執筆と編集は馬場が行なった。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に掲載した石器実測図の表現は『美女遺跡』（飯田市教育委員会 1998）に準拠した。なお、節理面は斜線で示した。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目 次

本文目次

序		(1) 積穴住居址	14
例言		1) 古墳時代	14
目次		2) 平安時代	14
第Ⅰ章 経過	1	3) 時期不明	18
第1節 調査に至るまでの経過	1	(2) 積穴	20
第2節 調査の経過	1	(3) 土葬墓・火葬墓・馬墓・土坑	20
第3節 調査組織	1	(4) 集石墓・集石	21
第Ⅱ章 遺跡の環境	3	(5) 溝址・溝状址	22
第1節 自然環境	3	(6) その他の遺構	23
第2節 歴史環境	3	(7) 遺構出土遺物	23
第Ⅲ章 調査結果	10	第IV章 総括	44
第1節 調査区の設定	10	引用参考文献	48
第2節 基本層序	10	報告書抄録	88
第3節 遺構と遺物	10		

挿図目次

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	7	挿図17 S K78~87	29
挿図2 基準メッシュ図区画調査位置	8	挿図18 S K88~96	30
挿図3 調査位置および周辺地形図	9	挿図19 S I 23~27	31
挿図4 基本層序	10	挿図20 S I 28~31	32
挿図5 遺構全体図	11・12	挿図21 S I 32~35・46	33
挿図6 S B14	13	挿図22 S I 36~39	34
挿図7 S B20・21	15	挿図23 S I 40~45	35
挿図8 S B22・23	17	挿図24 集石墓群分布状況	36
挿図9 S B17	18	挿図25 S D04~06	37
挿図10 S B15・16・18・19・25	19	挿図26 S D07~13	38
挿図11 S B24	20	挿図27 S D04北半と小柱穴	39
挿図12 S K31~34・S X01	24	挿図28 周辺小柱穴(1)	40
挿図13 S K35~42・44	25	挿図29 周辺小柱穴(2)	41
挿図14 S K43・45~52	26	挿図30 周辺小柱穴(3)	42
挿図15 S K53~58・62~64	27	挿図31 周辺小柱穴(4)	43
挿図16 S K65~77	28		

表 目 次

付表1 遺構土層注記(1)	50	付表4 遺構土層注記(4)	53
付表2 遺構土層注記(2)	51	付表5 遺構土層注記(5)・基本層序	54
付表3 遺構土層注記(3)	52		

図 版 目 次

第1図 SB14出土遺物	55	第9図 SB20・22・19、SK41・50 ・63・65・70・78・84出土遺物	63
第2図 SB14・23・20出土遺物	56	第10図 SK86・87・94、遺構外出土遺物	64
第3図 SB20~22出土遺物	57	第11図 遺構外出土遺物	65
第4図 SB22出土遺物	58	第12図 遺構外出土遺物	66
第5図 SK33・34・46・54・56・58 ・62・63・71出土遺物	59	第13図 遺構外出土遺物	67
第6図 SI27・31・32、SD04、 SX01、遺構外出土遺物	60	第14図 遺構外出土遺物	68
第7図 遺構外出土遺物	61	第15図 遺構外出土遺物	69
第8図 遺構外出土遺物	62	第16図 遺構外出土遺物	70
		第17図 遺構外出土遺物	71
		第18図 金属製品および埴輪	72

写真図版目次

図版1 SB14 SB20 SB21カマド	73	図版8 重機作業風景 発掘作業風景	
図版2 SB22 同カマド	74	委託基準点設置	80
図版3 SB23 同カマド SB24	75	図版9 SB14 SB20 SB21	81
図版4 SK34 SK54 SK56	76	図版10 SB22 SB24	82
図版5 SK63 集石墓群 SI32・45	77	図版11 SK34 SK54 SK62 SK63	83
図版6 SI33・35~39 同掘り方 SI41焼礫集積遺構	78	図版12 SI29 SI31 SI32	84
図版7 SD04北半 同押出仏出土状況 調査区全景	79	図版13 経石 遺構外出土遺物	85
		図版14 押出仏	86
		図版15 押出仏	87

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成9年11月25日付で、長野県飯田市吾妻町100番地 中部電力株式会社 飯田支店長 相馬保之より、飯田市座光寺4809-1他の開発に伴う、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画は、送電線鉄塔とそれに伴なう工事用道路を建設するもので、当該地が埋蔵文化財包蔵地新井原・石行遺跡にかかる。隣接地の一般国道153号飯田バイパス建設に先立つ緊急調査の結果では、縄文時代から中世にかけて居住域や墓域が重複している。特に古墳時代においては、長野県史跡高岡1号古墳をはじめ、高岡・新井原古墳群があり、市内でも有数の古墳密集地帯である。また、新井原・石行遺跡の西側には古代伊那郡衙の郡庁が置かれたと推定されており、古代以降政経の中心地域であったことは疑いない。事業計画地はこうした重要遺跡の一画にかかるため、事業主・飯田市教育委員会で協議した結果、発掘調査を実施し完全な記録保存を図ることとなった。

第2節 調査の経過

諸協議に基づいて、平成10年1月9日、飯田市座光寺新井原遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、本調査に着手した。2月5日から7日にかけて鉄塔建設部分に重機を入れて表土剥ぎを行ない、統いて、作業員を入れて作業を開始した。重機の荒れ土を除去し、堅穴住居址・溝址・土坑・小柱穴その他の遺構を検出し、順次掘り下げて精査した。そして、全体および個別の写真撮影、測量調査等を行ない、3月13日、現地での作業を終了した。期間中、1月中旬の未曾有の大雪をはじめ悪天候に左右され、調査の進捗は思うにまかせなかった。その後、平成9年度末まで飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真等について基本的な整理作業を行ない、概要報告の作成作業にあたった。

平成10年度は、工事用道路及び鉄塔以外の敷地についての発掘調査、出土遺物の整理作業、報告書作成作業を行なうこととなった。4月16日、発掘調査に着手した。重機による表土剥ぎに統いて、4月20日から作業員による作業を行なった。各遺構の検出・精査から写真撮影、測量調査を経て、6月2日現地作業を終了した。引き続き、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・写真撮影作業、遺構図等の作成・トレース作業、版組み等行ない、本報告書作成作業にあたった。

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助

調査担当者 馬場保之
調査員 佐々木嘉和・鳴海紀彦（平成9年度）・吉川 豊・山下誠一・吉川金利・伊藤尚志
下平博行・福澤好晃
西山克己（財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成10年度）
作業員 新井幸子・伊坪 節・今村勝子・太田沢男・岡田直人・岡田紀子・北原 裕
熊谷義章・小島康夫・竹本常子・田中 薫・樋本宣子・福沢トシ子・古林登志子
星野昌幸・細井光代・正木実重子・松下省吾・松下省三・柳沢謙二・山田三保子
吉川正実
新井ゆり子・池田幸子・伊東裕子・金井照子・金子裕子・唐沢古千代・木下早苗
木下玲子・小池千津子・小平晴美・小平まなみ・小林千枝・小林理恵・斎藤徳子
佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐藤知代子・関島真由美・高木純子・高橋恭子
田中 薫・筒井千恵子・中沢温子・中田 恵・中平けい子・林勢紀子・林ひとみ
原 昭子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・牧内喜久子・牧内八代・松島直美
松本恭子・三浦厚子・宮内真理子・森藤美知子・森山律子・吉川悦子・吉川紀美子

（2）指導

奈良国立文化財研究所 長野県教育委員会文化財保護課 （財）山梨文化財研究所 飯田市美術博物館
井上 正 織田顯行 柳原功一 小平和夫 畠 大介 松村恵司（個人…アイウエオ順）

（3）事務局

飯田市教育委員会博物館課

小畑伊之助（博物館課長）
小林正春（博物館課 埋蔵文化財係長）
吉川 豊（ “ 埋蔵文化財係）
山下誠一（ “ “ ）
馬場保之（ “ “ ）
吉川金利（ “ “ ）
伊藤尚志（ “ “ ）
下平博行（ “ “ ）
福澤好晃（ “ “ ）
牧内 功（ “ 庶務係）

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで同喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は赤石山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曾川・柄ヶ洞川による扇状地の形成、開析谷の浸食は著しい。下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る等複雑な微地形を呈する。

新井原・石行遺跡は座光寺地区の北部に所在する。座光寺地区と高森町を画する南大島川が木曽山脈より流れ出しており、その解釈谷は浸食が著しく規模が大きい。その南大島川が中位の段丘面上に形成した扇状地の、扇頂から扇央付近に位置する。今次調査地点の東側には湧水が点在している。微地形をみると、鉄塔建設部分のほぼ中央、北西から南東に向かって窪地になっている。この南側は工事用道路にかけて、やや尾根状に高くなっている。

第2節 歴史環境（挿図1）

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証しは旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段と中・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

上段では縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍藏の調査で知られた大門原遺跡等、また、扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原遺跡・中島遺跡がある。

縄文時代よりも古い遺跡・遺物はこれまでのところ確認されていない。縄文時代草創期の遺構・遺物は美女遺跡（飯田市教委 1998）で断片的に確認されており、爪形文土器群・表裏縄文土器が出土している。早期では、宮崎A遺跡（長野県教委 1971）・米の原遺跡・大門原遺跡・美女遺跡で押型文土器が出土している。特に、美女遺跡では立野式期の集落が調査され、11軒の竪穴住居址・炉穴・集石等の

遺構や多くの土器・石器が出土している。立野式土器の成立過程を解明すると同時に、伊那谷における縄文社会確立期の姿を明らかにする上で、重要な遺跡である。美女遺跡では、続く早期後葉から中期初頭まで断続的に集落が営まれており、早期後葉～前期初頭の良好な土器群が得られている。また、半の木井を挟んだ半の木遺跡でも、土坑から茅山下層式土器1個体が出土している。中期は多くの遺跡が知られているが、発掘調査された事例は少ない。大久保遺跡では、中期初頭の竪穴住居址1軒が調査され、良好な土器群が得られている（飯田市教委 1997）。大門原遺跡は東面した緩傾斜の扇状地扇丘部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成8年度に農道改良に伴い発掘調査が実施されており、縄文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認されつつある。この他、宮崎B遺跡・座光寺原遺跡（今村 1967）・宮崎南原遺跡では、縄文時代中期後葉の住居址が調査されている（長野県教委 1971）。後・晚期は、断片的に遺物出土がみられるのみで、人々の生活の場はほとんど確認されていない。山中の大釜遺跡（周辺遺跡位置図範囲外）では、後期前葉の注口土器等が出土している。南大島川縁の大井遺跡では、詳細時期不明であるが、3基の集石が調査され、川に面した臨時的な調理場と考えられている（飯田市教委 1997）。美女遺跡では貯蔵穴群が調査され、半の木井に面した低地に水場遺構があった可能性が指摘される等、中期に比べると低地に寄った集落展開が考えられる。

弥生時代では、中期の遺跡はほとんど知られておらず、後後に遺跡数の急激な増加がみられ、米の原遺跡や大門原遺跡でも土器片が採集されている。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。後期前半の座光寺原遺跡（今村 1967）や大門原B遺跡（長野県教委 1971）は後半までは継続しておらず、短期間に集落が廃絶している。続く後期後半では、中島遺跡（下伊那誌編纂會 1991）・宮崎A遺跡・美女遺跡等の調査例がある。中島遺跡は、昭和50年農業構造改善事業に伴ない、道路部分が調査され、さらに、平成8・9年度には広域農道新設に先立ちその東側部分が発掘調査され、大規模な集落であることが改めて確認された。座光寺原遺跡・中島遺跡とも低湿地を控えており、畑作と水稻を組み合わせていたと考えられる。

古墳時代では、大井遺跡で南大島川旧河道から管玉2点が出土しているが、他に当該期の遺構が確認されていないことから、遺跡の性格等不明な点が多い。この他、上段では、古墳は井下横古墳1基があるので、考古学的な痕跡は稀薄となる。同様に奈良・平安時代についても断片的に遺物が得られていてるにすぎない。古墳時代以降は散在的な集落景観が考えられよう。

中世には、段丘崖上部に北本城城跡（1981年調査）・南本城城跡・浅間岩が築かれ、小河川に開析された複雑な地形を生かしている。北本城城跡は4つの曲輪を主体とした居城的な城郭で、16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承がある以外は記録等全くなく、その築城・廃城の時期や治めていた氏族等も不明である。現在のところ、座光寺の地名に共通する座光寺氏の居城であるという説が有力である。平成2年度に行なわれた児童センター建設に先立つ二の曲輪の調査では、恒久的な施設のばかりでなく簡易的な施設も確認され、この部分が居住機能と防衛機能とを併せ持っていたことが明らかにされた（飯田市教委 1992a）。南本城城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡で、防衛施設の整った防衛専門の城郭で、北本城に関連するとされる。

近世では、大門原D遺跡で火葬墓・土葬墓5基が調査されている（長野県教委 1971）。

中。下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎占地した地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地に立地する。縄文時代中期を除く他時期は遺物が中心で集落の実態は明確でないが、資料が十分でない各期にあって比較的良好な資料を提示している。旧石器時代終末から草創期にかけての遺物は、本遺跡で中世の溝跡から有舌尖頭器が出土している（岡田 1986）。早期は本遺跡で細久保式土器・沈線文土器・条痕文土器などが出土している他、恒川遺跡群の新屋敷遺跡では相木式の遺物集中や塙屋式期の遺構等があり、細久保式・高山寺式土器等も出土している（飯田市教委 1986）。半の木遺跡（1996年調査）でも樋沢式や茅山下層式といった土器や同じ時期の遺構が調査されている。前期は断片的な資料が恒川遺跡群で得られているにすぎない。しかし、中期については、本遺跡で後葉のかなり大規模な集落の一部が調査されており、低位段丘の大規模集落の存在に目を向けることになった。後期から晩期の前半にかけての様相は、前期同様詳らかではない。晩期終末には本遺跡から竪穴住居址と浮線文系や条痕文系の土器群が見つかっている。

弥生時代には、中期前半は断片的な資料はあるものの、これまでのところ遺構が認められない。後半には恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が調査されており、広範に住居址が分布し、段丘上全体を居住空間とした集落展開がする。後期前半には遺構の分布が稀薄になり、段丘上の特定地域に居住空間を限定した可能性が指摘されている。後半になると住居址が恒川遺跡田中地籍に集中し、その中でも台地縁辺部の集落域とより内側の墓域の分化がみられるようになる（飯田市教委 1988）。

古墳時代前期においては、基本的に前時代にみられた集落展開が継続する。中段の半の木遺跡でも住居址1軒が調査されている。後期になると、住居址が増加し、恒川遺跡群ではほぼ全域に分布が拡大する。遺物等からみた3~4小期の変遷では、奈良時代直前には新屋敷遺跡や恒川遺跡恒川B地籍に限定的に遺構がみられることから、この時代の集落の在り方は必ずしも一様でなく、終末期にはより政治的な規制が加わった可能性が指摘されている（飯田市教委 1986）。古墳は竜丘地区・松尾地区に次いで多く築造されており、後期の古墳が多い。その分布は集落の外縁の、高岡第1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および恒川遺跡群東側の段丘崖上等にみられ、集落域・生産域とは分化された姿がある。これまで調査された古墳は新井原12号古墳（1922年・1980年調査、飯田市教委 1986）をはじめとする新井原古墳群・畦地1号古墳（1923年他調査）、北本城古墳（1981年調査）、老丈藪3号古墳（1984年調査）、高岡3号・4号古墳（飯田市教委 1990）・ナギジリ1号古墳（飯田市教委 1998）等がある。新井原12号古墳では4号土坑から馬具・馬骨が出土し、12号墳に副葬されたと考えられる。新井原2号古墳では鹿の線刻画のある埴輪片が出土した他、周溝内部から馬を副葬した土坑3基が見つかっている。畦地1号古墳では銀製垂飾付長鎖式耳飾が出土している。北本城古墳は上段の段丘の縁に占地する。前方後方墳ではないかとされる古墳で、こうした墳形は飯田下伊那地方では他に長野県史跡代田山孤塚古墳があるだけである。濃尾地方の前方後方墳との関連が指摘されている。老丈藪3号古墳やナギジリ1号古墳は、副葬品に後期古墳に特徴的とされる馬具類が多く、追葬の結果複数組の金環がある。なお、今次の工事用道路の調査部分は、新井原11号古墳（通称『経塚』）の墳丘裾にあたる。『下伊那史』第二巻（1955）によると、今から160年ほど前、採土のため古墳の南側約1/3を掘り取ったところ、金鍍金の轡の他に経石がたくさん出てきて経塚だろうということになったが、その後、採石のため石室は破壊されたということである。遺物は頭蓋骨・鉄鎌・馬具等があったとされる。

奈良時代には信濃国伊那郡に含まれ、恒川遺跡群はかねてより古代「伊那郡衙」ないしは『三代実録』

にみられる定額の寂光寺の有力な比定地とされてきた。昭和51年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鉢・和同開珎銀錢等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている（飯田市教委 1986）。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果、平成6年度の調査で正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的な地点をあげて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。さらに平成7・8年度の薬師垣外地籍の調査では、区画の溝内部から古瓦が出土し、郡家ないし寺院が付近に存在する可能性が指摘されている。また、バイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍・新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある（飯田市教育委員会 1988・1991a・1991b）。この時代には金井原瓦窯址で瓦生産が行なわれ、半地下無段式窯窯1基と工房址2棟が調査されている（宮澤 1953・54、飯田市教委 1996）。西三河北野系の影響を受けているとされ、高森町古瀬遺跡からも同范の瓦が出土している。また、前述の恒川遺跡群薬師垣外地籍の他、如来寺境内・古瀬平遺跡・本遺跡からも古瓦が出土している。

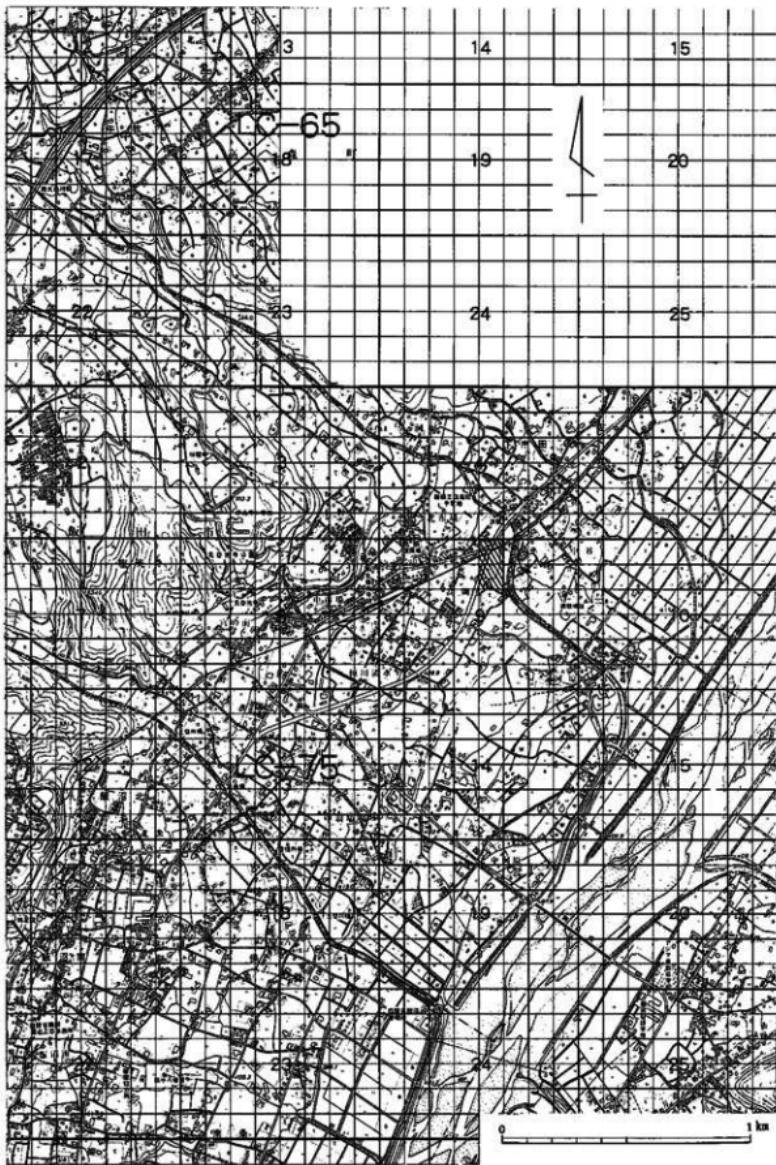
平安時代から中世にかけては、恒川遺跡群を中心に住居址・建物址・溝址・土葬墓・火葬墓等が調査されている。恒川遺跡群では、平安時代前期には前時代の名残りとして官衙的な遺構・遺物があるが、中期以降一般集落に変貌していく。こうした中で小鐵塔・小鐵塔・火葬墓1基が調査されている（具体的な位置は不明であるが、今次鐵塔建設用地部分の一画と思われる。）他、中世には本遺跡では土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこの辺りが墓域であった様子がうかがえる。

以上、座光寺地区の遺跡を中心に各時代を概観した。この歴史的脈絡の中で、本遺跡の今次調査がどのように位置づくかは、以下本書の内容に譲る。

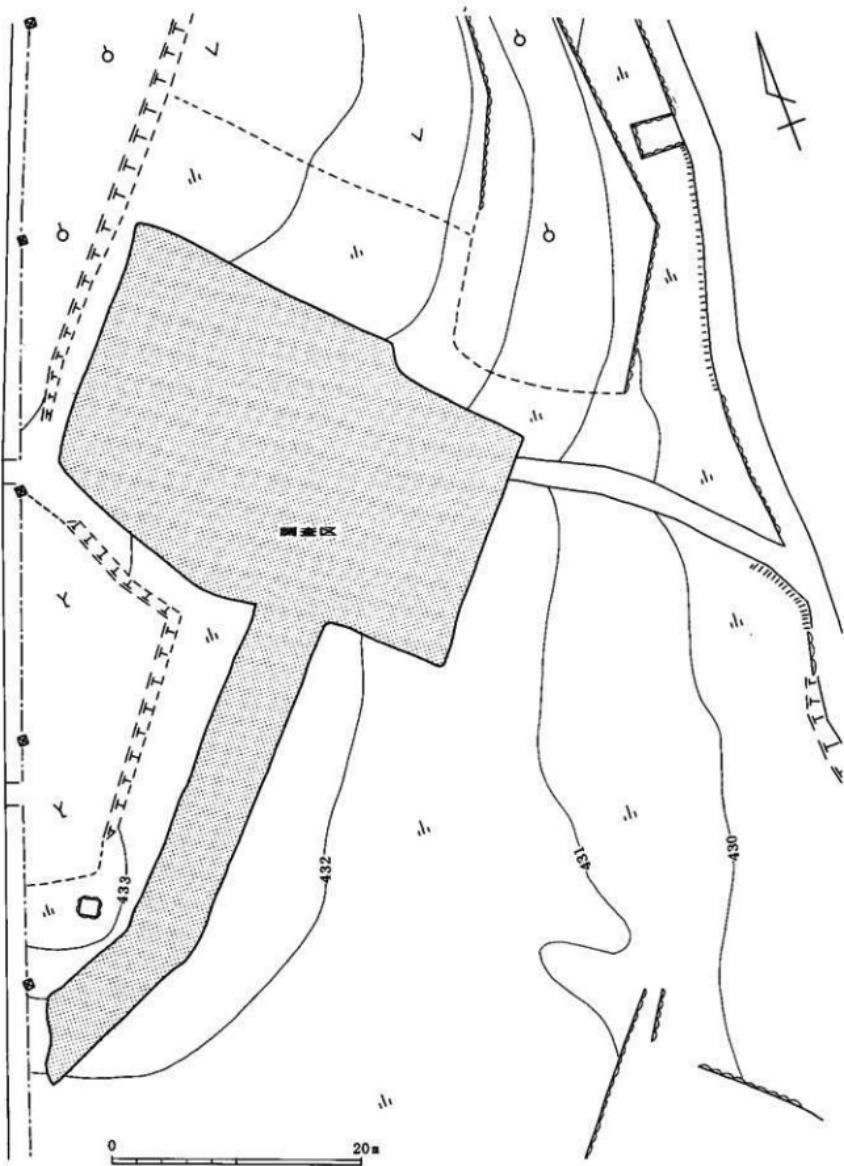


- 1. 新井原・石行遺跡 2. 美女遺跡 3. 半の木遺跡 4. 井下横古墳 5. 座光寺原遺跡
- 6. 中島遺跡 7. 北本城城跡 8. 北本城古墳 9. 南本城城跡 10. 浅間巣 11. 老丈鍬3号古墳
- 12. 畑地1号古墳 13. 新井原12号古墳 14. 高岡1号古墳 15. 高岡3号古墳 16. 高岡4号古墳
- 17. 金井原瓦窯址 18. 如来寺境内 19. 古瀬平遺跡
- 恒川遺跡群…A. 新屋敷 B. 阿弥陀垣外 C. 恒川B D. 恒川A E. 田中・倉垣外 F. 薬師垣外

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図



挿図2 基準メッシュ図区画調査位置



挿図3 調査位置および周辺地形図

第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査区の設定（挿図3）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については、飯田市教育委員会 1998『美女遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-75 9-5、同9-13内に位置し、9-5をI区、9-13をII区とする。

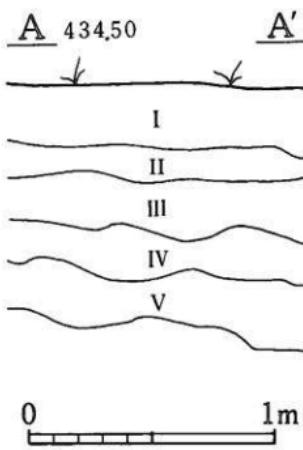
第2節 基本層序（挿図4・5）

基本層序は挿図4のとおりであり、V層下面で遺構を検出した。自然環境の項で触れた窪地部分にかかり、斜面地の堆積状態を示している。

第3節 遺構と遺物

調査された遺構の概要是、以下のとおりである（挿図5）。

竪穴住居址	6軒
竪穴	6基
土葬墓	4基
火葬墓	6基
馬墓	2基
その他土坑	61基
集石墓	17基
焼礫集積遺構	1基
その他集石	6基
溝址・溝状址	10条
その他	1基
小柱穴	多數



挿図4 基本層序

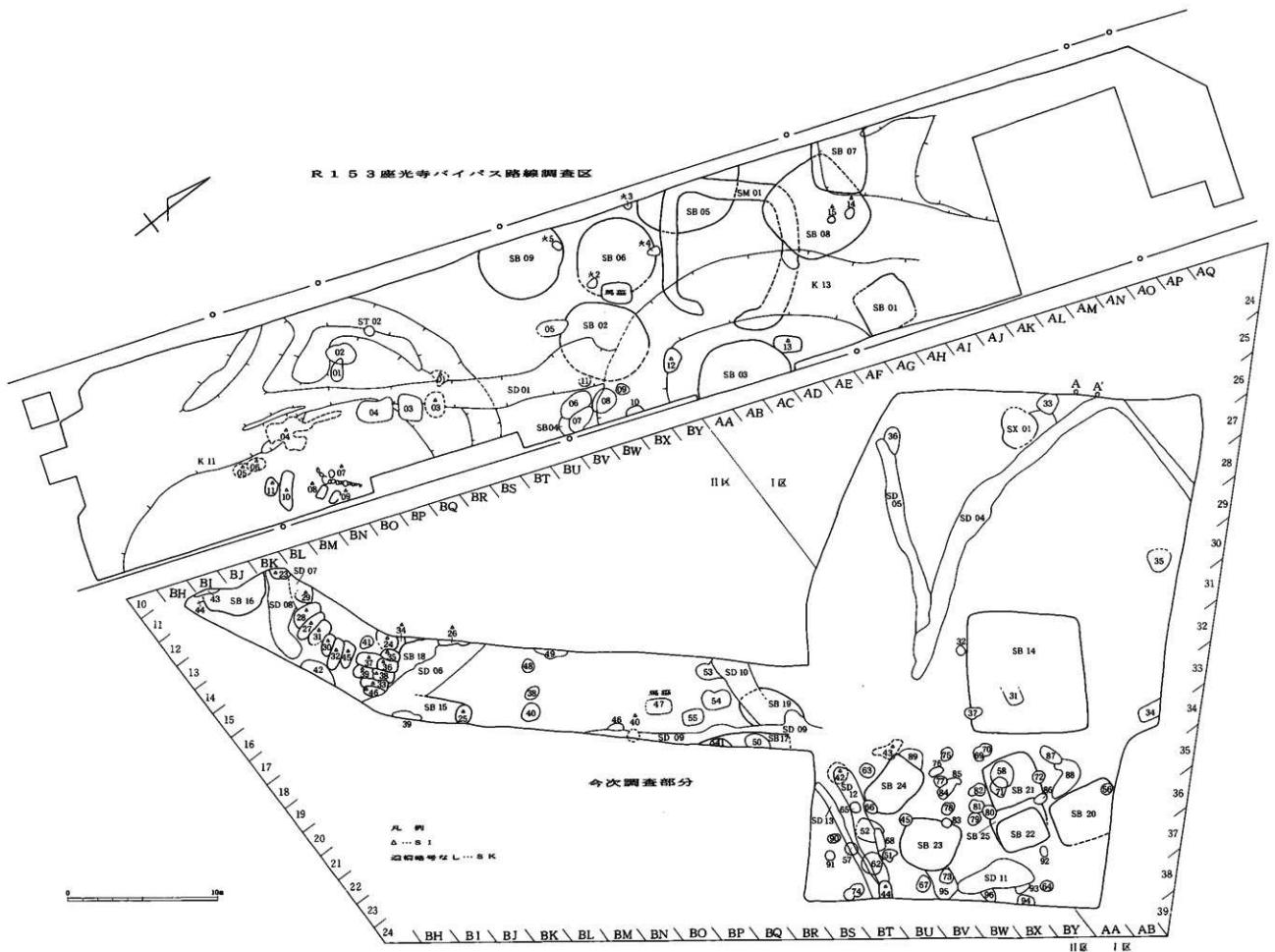


図5 遺構全体図

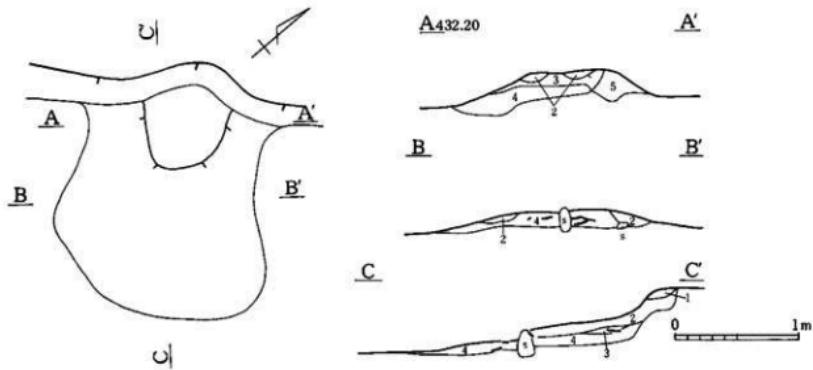
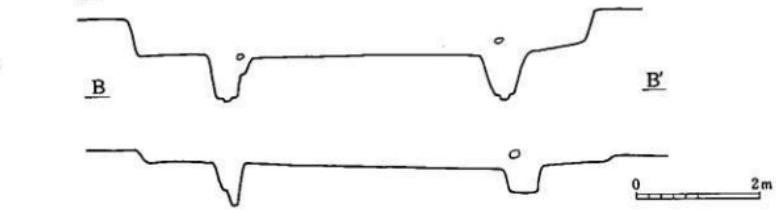
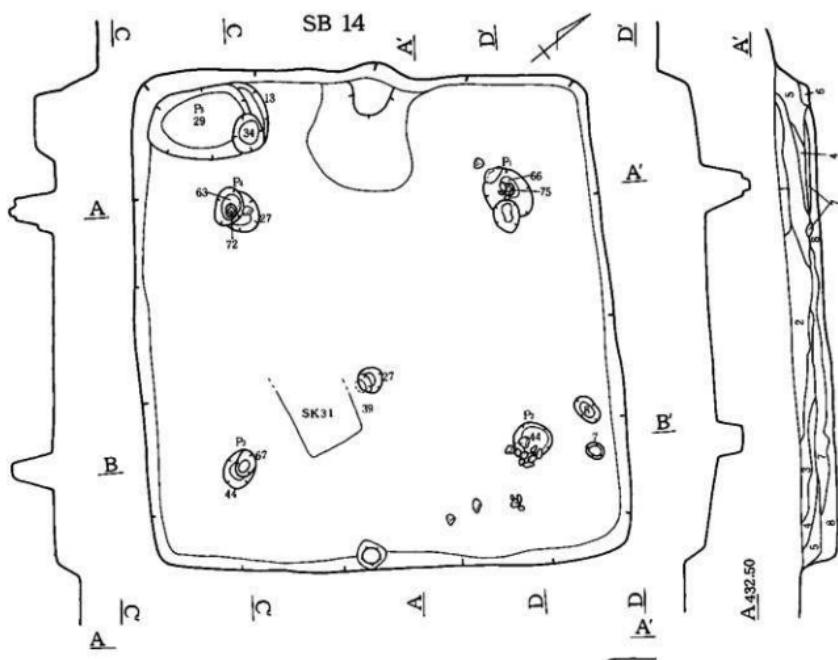


図6 SB14

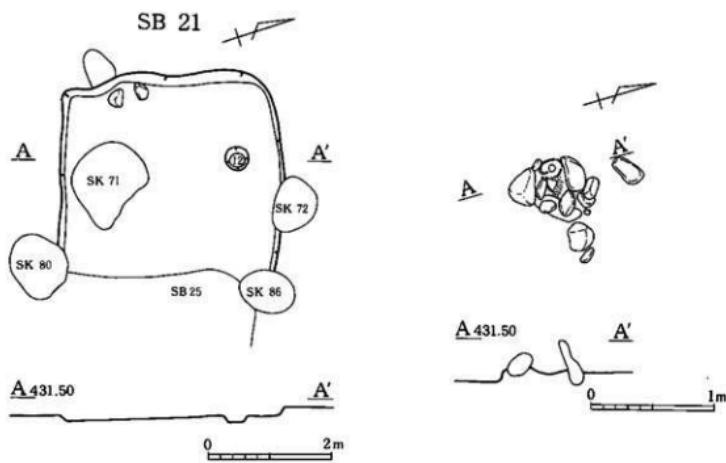
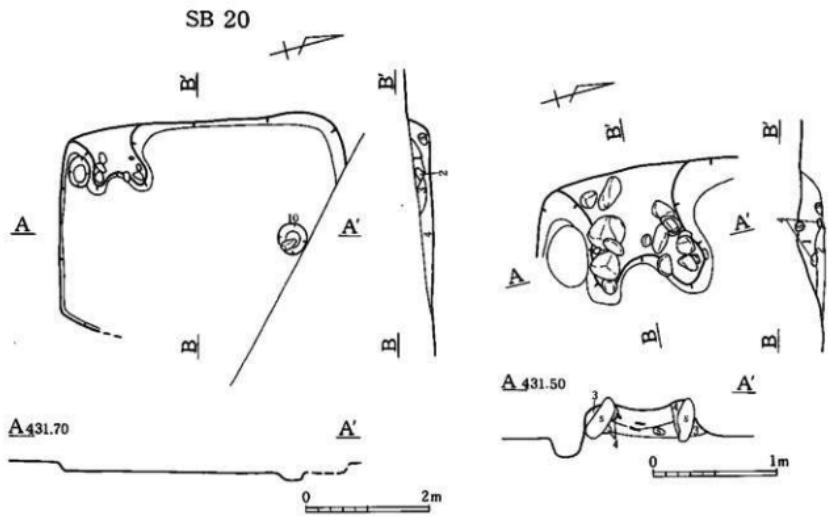
(1) 壺穴住居址

1) 古墳時代

遺構番号	S B14	検出位置	I 区 A C 29他	時 期	5世紀後半～末		
規 模	800×780×70cm	長 軸	N56.5° W	平 面 形	方 形	床面積	54.2m ²
検出状況	埋土が明確に異なり検出された。						
重複関係	S K37を切り、S K31に切られる。						
壁	明確で、やや緩やかな立ち上がりを示す。						
床	硬い部分はない。掘り方があり、貼床される。						
柱 穴	主柱穴P 1～P 4、補助柱穴あり。						
カ マ ド	北西壁中央にカマド。袖構築材が散らばり、火床部分が明確に把握できないほど破壊されている。粘土は用いられているが、石芯かどうかは不明。支脚の周囲に破壊跡と考えられる土師器甕の投棄あり。						
付属施設	P 5は貯蔵穴と考えられる。						
遺 物	埋土中全般から出土したが遺物量は少ない。土師器甕・壺・鉢。						
そ の 他	P 2周囲に焼土・炭の集中2か所あり。本址に伴なうかどうか不明。自然埋没と考えられる。						

2) 平安時代

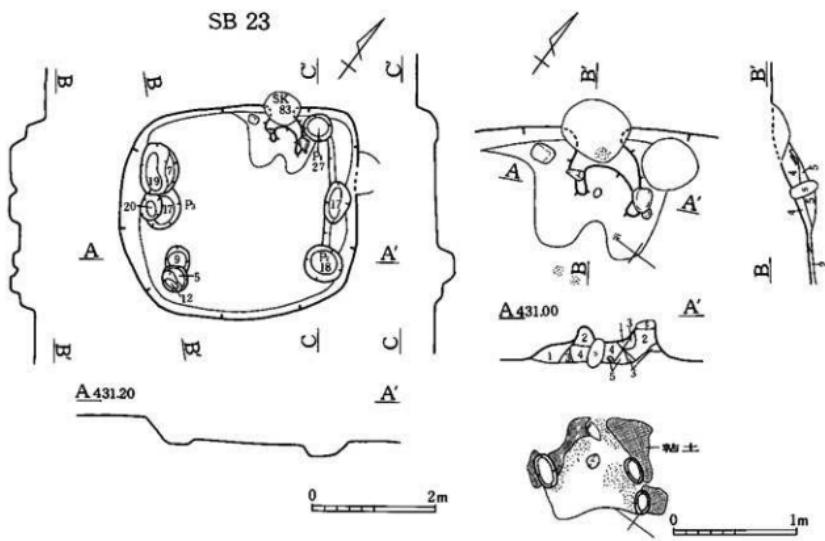
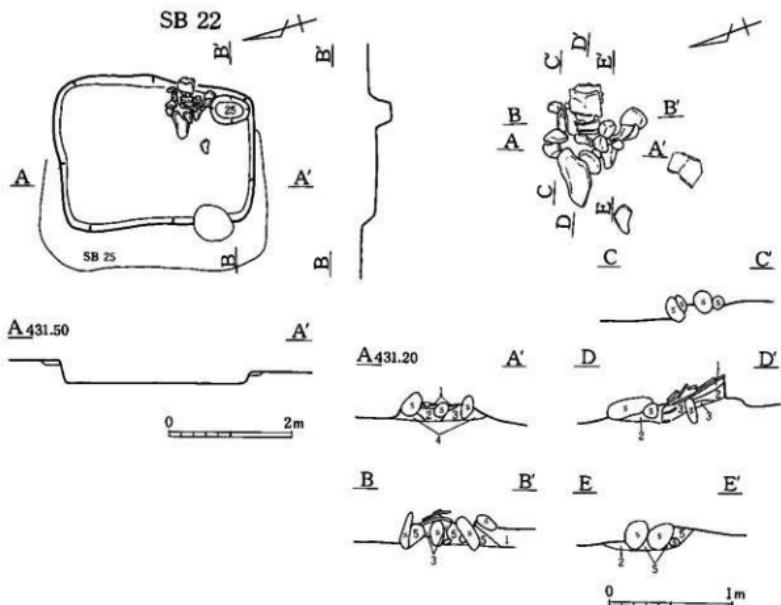
遺構番号	S B20	検出位置	I 区 A C 34他	時 期	9世紀後半		
規 模	(340)×460×40cm	長 軸	N79.0° W	平 面 形	不整長方形		
検出状況	埋土が地山と異なり明確に検出された。東側を削平した。						
重複関係	S K56に切られる。						
壁	明確で、ほぼ垂直に立ち上がる。						
床	掘り方があり、貼床されている。壁下を除いて硬い。						
柱 穴	不明である。小柱穴						
カ マ ド	西辺南西隅寄りに構築される。石芯粘土カマドである。						
付属施設	なし。						
遺 物	西辺の壁際に多いが、破片が多い。土師器甕・壺(内黒)、須恵器壺、灰釉陶器碗・皿、砥石。灰釉陶器碗底部高台内に『大』と墨書きされる。						
そ の 他	中央や北東寄りの床直上に炭があり、その上位3～5cm浮いて礫が集中する。礫の下より灰釉陶器皿出土。自然埋没と考えられる。						



插図7 SB 20・21

遺構番号	S B21	検出位置	I 区 A A32他	時 期	9世紀後半
規 模	- × 360×15cm	長 軸	N72.5° W	平 面 形	不整形とと考えられる。
検出状況	カマドが検出され、住居址であることが判明した。埋土が僅かに周囲とは異なるが、プランは明確に把握できなかった。				
重複関係	S B25・S K58に切られ、S K71・S K72・S K80・S K86と重複する。				
壁	不明確である。				
床	硬い部分はなく、貼床は確認できない。				
柱 穴	主柱穴その他不明である。				
カ マ ド	西辺南西隅寄りに構築される。石芯粘土カマドで、前面に天井石が転落する。火床の奥に土師器甕が正位に立った状態で据えられる。				
付属施設	不明。				
遺 物	遺物量は少なく、土師器甕・高坏あり。カマドより刀子片出土。				
そ の 他	自然埋没と考えられる。				

遺構番号	S B22	検出位置	I 区 A A34他	時 期	9世紀後半
規 模	240×310×35cm	長 軸	N102.5° E	平 面 形	不整長方形
検出状況	カマドの煙道が確認され、住居址であることが判明した。埋土は周囲と不明瞭ながら異なり把握された。				
重複関係	S B25を切る。				
壁	明確でほぼ垂直に立ち上がる。				
床	掘り方があり、貼床されているが軟弱である。				
柱 穴	不明である。				
カ マ ド	東辺南東隅寄りに構築される。石芯粘土カマドで、遺存状態は良好である。煙道に円筒埴輪2個体が転用される。天井石が前面に転落する。				
付属施設	なし。				
遺 物	遺物は全般に少なく、土師器甕・坏・高坏、須恵器坏、灰釉陶器碗・皿等あり。				
そ の 他	自然埋没と考えられる。				



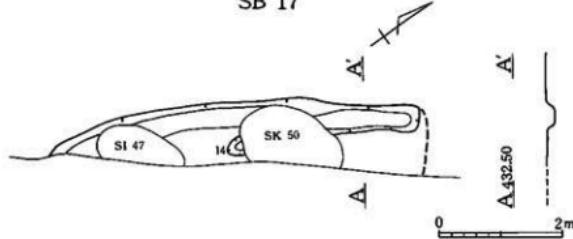
插図 8 SB 22・23

遺構番号	S B23	検出位置	II区B W32他	時 期	9世紀後半?
規 模	340×380×30cm	長 軸	N39.5° W	平 面 形	不整隅丸方形
検出状況	埋土が明確に異なり、把握された。				
重複関係	S K45・S K83に切られ、S K95と重複する。				
壁	明確で、緩やかな立ち上がりを示す。				
床	カマド前面が部分的に硬い。掘り方はあるが、貼床はやや不明確。				
柱 穴	把握できず。柱穴P 1～P 3等を検出。				
カ マ ド	北西辺中央より北寄りに構築されている。石芯粘土カマドで煙道あり。				
付属施設	なし。				
遺 物	遺物は全般に多く、土師器壺・坏・高坏・瓶、須恵器壺・甕・蓋が出土。僅かに灰釉陶器。				
そ の 他	規模・形態やカマドの位置から平安時代と考えられる。しかし、出土遺物は古墳時代のものが圧倒的多数を占める。重複して古墳時代の住居址があった可能性もある。自然埋没と考えられる。				

3)時期不明

遺構番号	S B17	検出位置	II区B T26他	
規 模	- × - × - cm	長 軸	(N59.0° W)	平 面 形 方形と考えられる。
検出状況	貼床および周溝から住居址として把握した。			
重複関係	S K50・S I47を切る。S D09と重複するが、新旧関係は不明である。			
壁	断面観察の結果、ほぼ垂直に立ち上がる。			
床	貼床されており、堅固である。			
柱 穴	不明。			
周 溝	幅40cm、深さ12cm。			
カマド等	不明。			
付属施設	不明。			
遺 物	ほとんどなし。			

SB 17

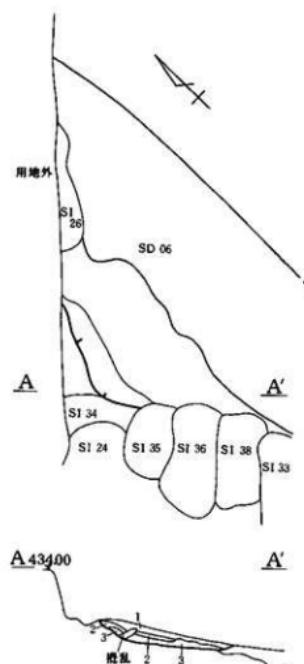
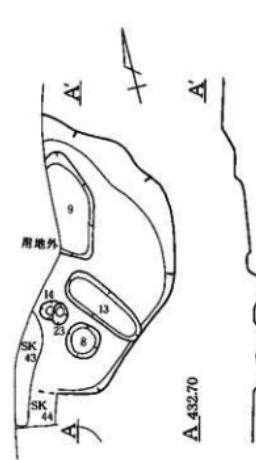
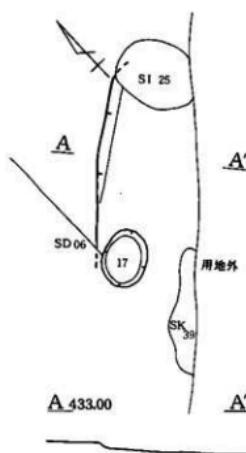


挿図9 SB 17

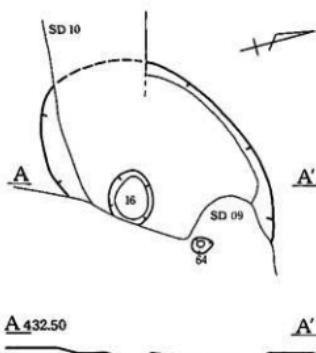
SB 15

SB 16

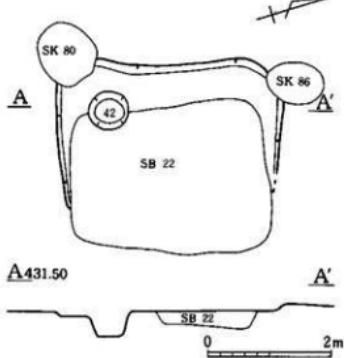
SB 18



SB 19



SB 25



挿図10 SB 15・16・18・19・25

(2) 壺穴

壺穴住居址と判断された遺構以外の、壺穴状の遺構をまとめた。特記されるもののみを記す。

① SB 18

SD 06を切って検出された。底面は著しく硬く締まっており、SD 06上部にまで及んでいた。立ち上がりが把握されたのは西側の壁の一部で、緩やかに立ち上がる。常滑窯破片が出土しており、集石墓群とほぼ同時期と考えられることから、墓道の可能性がある。

② SB 24

不整形を呈する。検出面からそれほど深くない掘り込みで、底面は軟弱で平坦ではない。轟羽口・鉄滓が出土した他、鉄滓小片も磁選されている。しかし、鐵造剝片は磁選されなかった。出土遺物から工房址（鍛冶関連？）と考えられるが、時期等詳細は不明である。

(3) 土葬墓・火葬墓・馬墓・土坑

① 土葬墓

土葬墓は、SK 34・SK 41・SK 54・SK 56の4基である。SK 34東壁は小石が積まれたようにならんでいた。SK 54はSB 20調査中に検出され、埋土がSB 20と異なることから、SB 20を切ると判断された。掘り方底面より浮き、しかも逆位で出土している。SK 34に副葬された灰釉陶器長頸瓶（第5図2）。SK 54副葬の灰釉陶器手付小瓶（4）は、光ヶ丘1号窯段階の東濃産、SK 56出土の綠釉陶器碗（5）は黒笹90号窯ないし14号窯段階の京都産と考えられる。朱墨パレットに転用されている。以上3基は副葬された遺物から9世紀中葉～後半に位置づく。SK 56については、SB 20の年代観とほぼ同時期で、検出状況と矛盾がある。

SK 41には集石墓群と同様、経石が多数埋納されていたことから土葬墓と判断した。集石墓と同時期の中世前半に位置づくと考えら



挿図11 SB 24

れる。『散(?)』・『彩(?)』・『我』と墨書きされた経石がある。

②火葬墓

火葬墓はSK31・SK32・SK45・SK51・SK62・SK63の6基で、前5基は焼骨・炭を多く含む。SK63については、炭は含むものの焼骨ではなく、また、上部に平坦な石2個（うち1個は縄文時代の石皿が転用されている）が並べられており、下部から灰釉陶器長頸瓶が横倒しの状態で出土した。積極的に火葬墓とする理由はない。SK62出土の灰釉陶器短頸壺（9）は猿投産と考えられ、9世紀後半、あるいは10世紀代まで下るかもしれない。平瓶（10）は頸部と把手の付根付近のごく一部が残存しているにすぎない。SK63に副葬された灰釉陶器長頸瓶（13）は、光ヶ丘1号窯段階の東濃産と考えられる。12は須恵器坏底部破片に、底部に墨書きがある。

③馬墓

馬墓はSK47・SK52の2基が調査された。SK47は長方形の掘り方の北隅から馬の臼歯が出土した。遺存状態は良好である。SK52は掘り方の形態が不整形で、SK47をはじめ、市内で調査されている古墳時代の馬墓とは形態を異にしている。中世と考えられるSD12を切っており、後代のものである。遺存状態は悪い。

④土坑

上記3種の遺構を除く穴を土坑とした。SK58出土の土師器坏8は口縁部の一ヶ所が片口状に張り出す。SK83からは鉄滓が出土した他、銀造剥片が磁選されている。

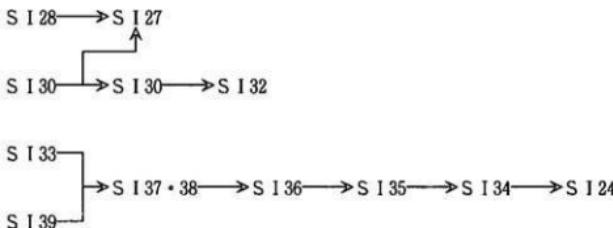
(4) 集石墓・集石

①集石墓

集石のうち、SI23・24・26～39・45・46である。SI36～39を典型例として、長方形の掘り方（長辺1.0～1.2m、短辺0.5～0.7m、深さ30～50cm）を有し、掘り方内部に底部まで礫が密集している。生骨・焼骨・炭・焼土は検出されていない。各遺構から経石が出土したほか、SI30から常滑壺、SI36から古瀬戸三筋壺が出土している。なお、銭貨の出土はない。経石は上面を中心に疊層からも若干の出土をみた。経石の出土から經塚の可能性も示唆されるが、集石が群になっている状況（挿図24）や掘り方の形態から經塚よりむしろ集石墓（土葬墓）である可能性が高いと考えられる。底面まで礫が密集している状況は、直接土葬されたのではなく、何らかの有機質の棺に遺骸が納められていた可能性を示唆する。出土遺物から14～15世紀の年代が与えられる。

礫の検出状況（重なり具合、礫の大きさや配列等）から判断された遺構の新旧関係は、以下のとおりである。SI24はSI34を切る。SI27はSI28・31を切る。SI30はSI31を切る。SI32とSI45は当初一つの遺構と考えていたが、掘り方の状況から別遺構と判断した。新旧関係は不明である。SI32はSI30を切る。SI33とSI46は当初一つの遺構と考えていたが、掘り方の状況から別遺構と判断した。新旧関係は不明である。SI33はSI38・39に切られる。SI34は中間の礫を掘り飛ばしてしまっ

た。S I 35はS I 34に切られ、S I 36を切る。S I 36はS I 37・38を切る。S I 39はS I 37・38に切られる。以上を古→新で整理すると、



の大きく2つの流れがある。

各集石墓内から出土した経石には、一字一石経がある。『穂(?)』・『律(?)』(以上S I 29)、『妙』(S I 31)、『提』・『法』(以上S I 32)、『入』(S I 35)、『旅(?)』・『薩(?)』・『和』(S I 36)である。

②集石

S I 41は焼礫集積構造で、この他可能性のあるものとして、S I 29が考えられる。S I 42は平安時代の遺構掘り込み面の上位、また、中世と考えられるSD12の上部で検出されており、新しい時期のものと考えられる。

(5) 溝址・溝状址

①溝址

S D04(挿図25)の北半(I区A G24以北)は、溝の幅が狭くほぼ一定で、壁もほぼ垂直に立ち上がる。これに対して、I区A I 24以南は幅が広くなり、壁の立ち上がりは緩やかとなる。北半部分には埋土中に径10~40cm程度の河原礫が入るが、水が流れた痕跡はない。南側は、埋土中に疊がなく、しかも蛇行するなど、連続する溝址として把握したもの、性格が異なるように思われる。I区A K24で長軸方向をN 0° EからN 90° Eに直角に振っており、方位を意識した方形の区画、ないし建物の雨落ち溝が考えられる。S K35北東側壁際の落ち込みがあるいは溝の東辺の一部にあたるかもしれない。また、特にこのI区A G~A L列・24~28列部分には、小柱穴の集中がみられる(挿図27)。建物址の存在が考えられるが、把握までに至らなかった。S K33・S X01との新旧関係から、9世紀後半以降と考えられる。本址からの出土遺物は、I区A L27内の押出仏があり、潰され一塊になって出土した。

押出仏(第18図1~3)は、型に銅板をあて文様を打ち出し、鍍金を施す。叩きが丁寧で、打ち出された文様が克明である。また、平均して非常に薄く、打ち出しの失敗による孔がほとんどない等、巧みな技術で製作されている。少なくとも主尊・脇侍2体。その他2体の5体の頭部があり、如来三尊形式の可能性が高いが、尊名の特定は困難である。主尊は左胸から頭部にかけての一部が欠損している。坐像で、脚部については右足を上にして結跏趺坐するものと思われる(吉祥坐)。右手を屈臂し、掌を外に向かって、第四・五指を曲げる。左手は納衣を摘んでいる。納衣の着方は偏袒右肩のようである。台座は

蓮華座の一部とみられる部分が残っている。光背は単身光で、上部に宝珠がつく。両脇侍は立像と考えられ、表情はやや硬く、決して洗練されているとはいえない。右脇侍は頭部の一部が残存する。左脇侍は正面を向いている。髪は単髪ないし七山髪を結う。尊像・光背、そしてそれを取り巻く場面が描かれているようで、装飾が多いのが特徴である。製作年代については、形式としては古い形式を示しており、7世紀末ないし8世紀初頭頃に製作された可能性が高い。用途として、礼拝の対象として安置されたり、また金堂・塔など伽藍主要建築の内壁の装飾が考えられるが、本遺跡の遺構・遺物の検出状況から、前者と考えられる。出土状況から一塊であったと判断されるが、非常に脆弱で、調査時に主尊の体部を除く部分が100片以上の細片となってしまっている。残存している割合は1/3～1/4程度と推定され、寸法等は不明である。

S D06・08は一般国道153号座光寺バイパス路線内で検出された、新井原11号古墳の周溝に連続する位置にあることから、同古墳の周溝である可能性が高い。S D08に隣接するS D07より巻の一部が出土しており、同古墳に伴なう遺物と考えられる。

S D12・13はほぼ併行しており、同時期の遺構と考えられる。S D12より、陶器壺片が出土したことから、中世に位置づくと考えられる。

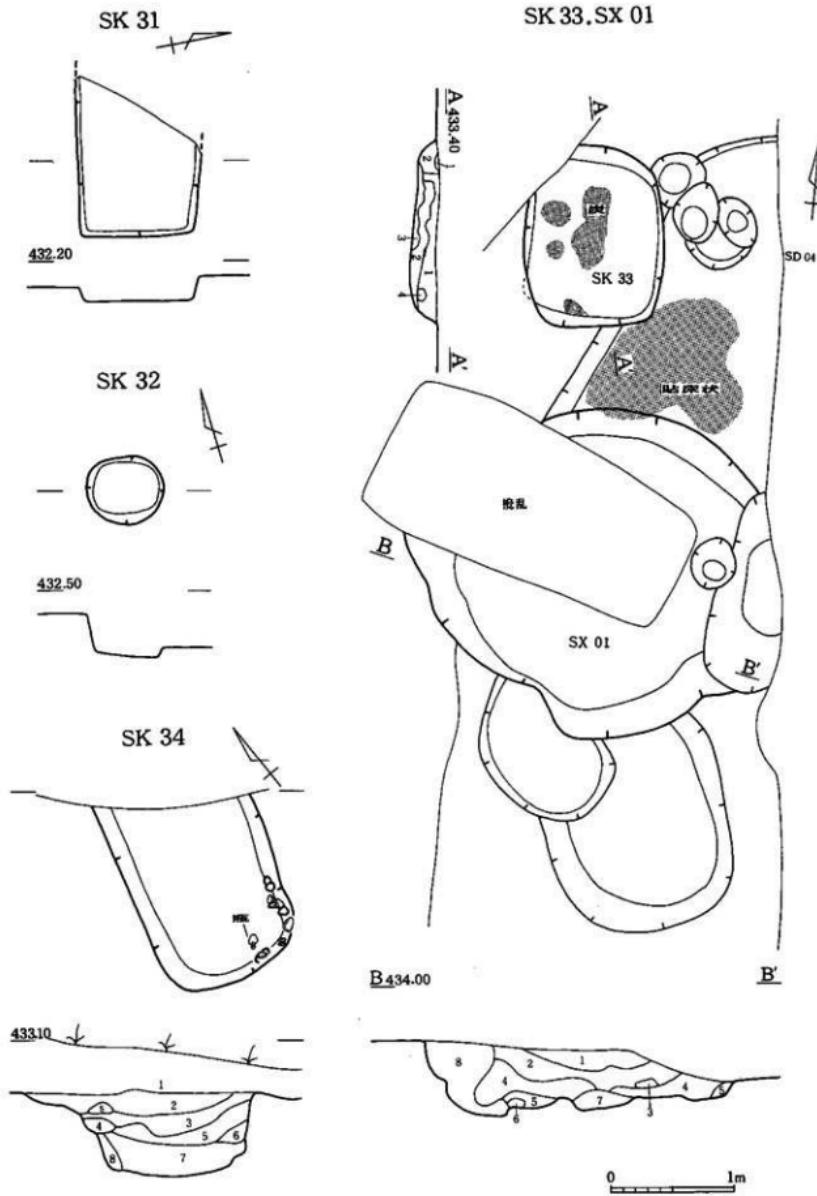
この他、直接に連続性は把握できなかったものの、S D04南半とS D09、S D10とS D12が位置関係から連続する可能性が指摘できそうである。

(6) その他の遺構

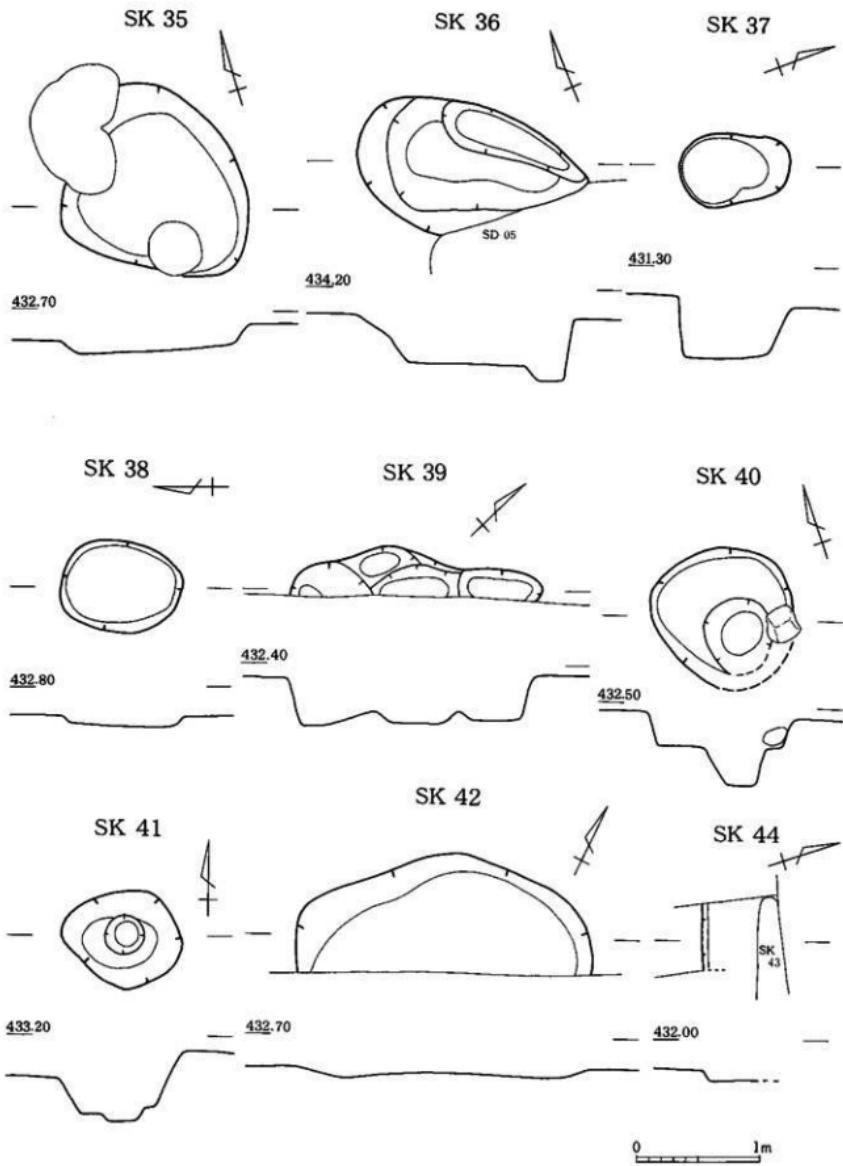
S K33とS X01は隣接しており、中間に貼床状の部分（スクリーントーン貼付部分）がある。両遺構から鉄滓が出土していることから、一連の遺構（工房址）と判断した。S D04内の本址と重複する部分から、不明鉄製品（第18図4）や鉄滓が出土していることから、S D04の東側まで延びていた可能性もある。詳細時期が判る遺物はないが、灰釉陶器壺片等から、平安時代の住居址群と同様、9世紀後半頃に位置づくと考えられる。

(7) 遺構外出土遺物

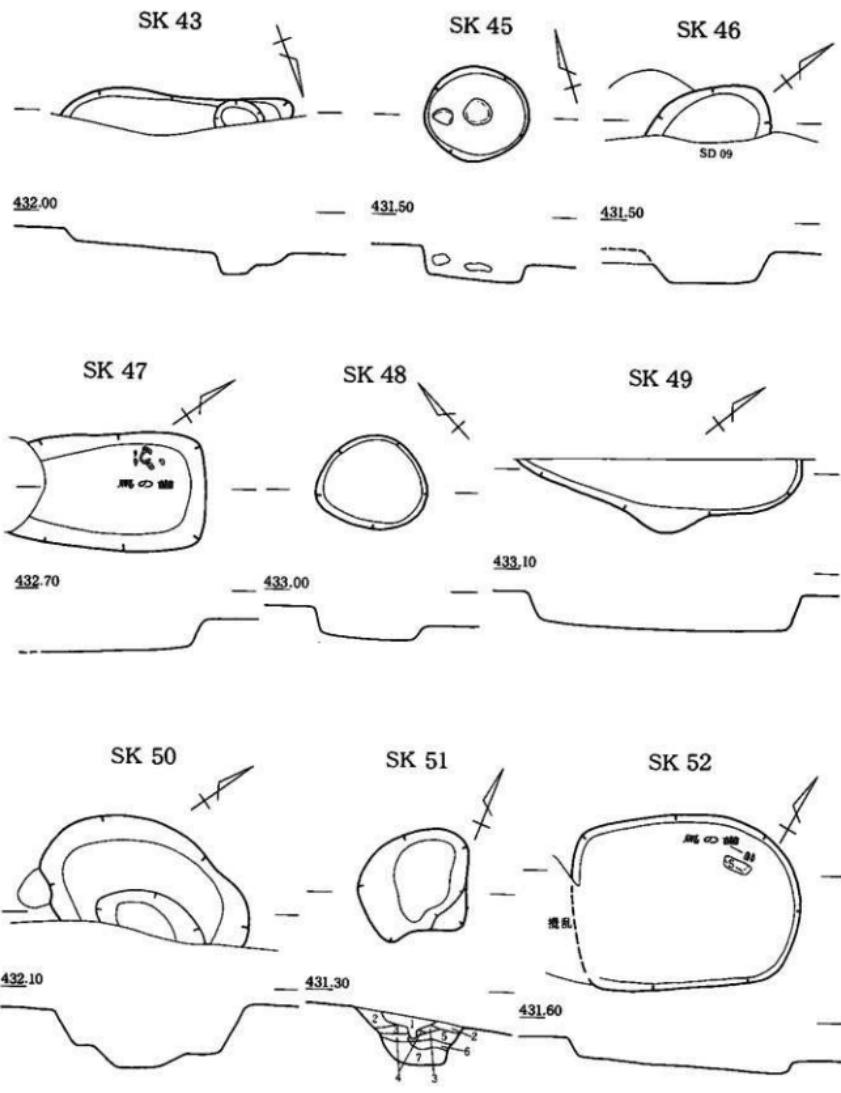
縄文時代前期後葉・中期後葉～晩期の土器・石器・土製品、弥生時代の土器・古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器等が出土している。特記される遺物のみ記述する。第6図9・第8図2は土偶の腕の部分、第8図1はミニチュア土器である。第18図8はI区A L24付近で出土した盾の一部とも考えられる形象埴輪の破片で、新井原13号古墳に伴なうものと考えられる。この他I区からは、円筒埴輪片が10数片出土している。さらに上記集石墓出土以外の一石経として、『尼』・『法』・『能』等がある。



挿図12 SK31~34・SX01

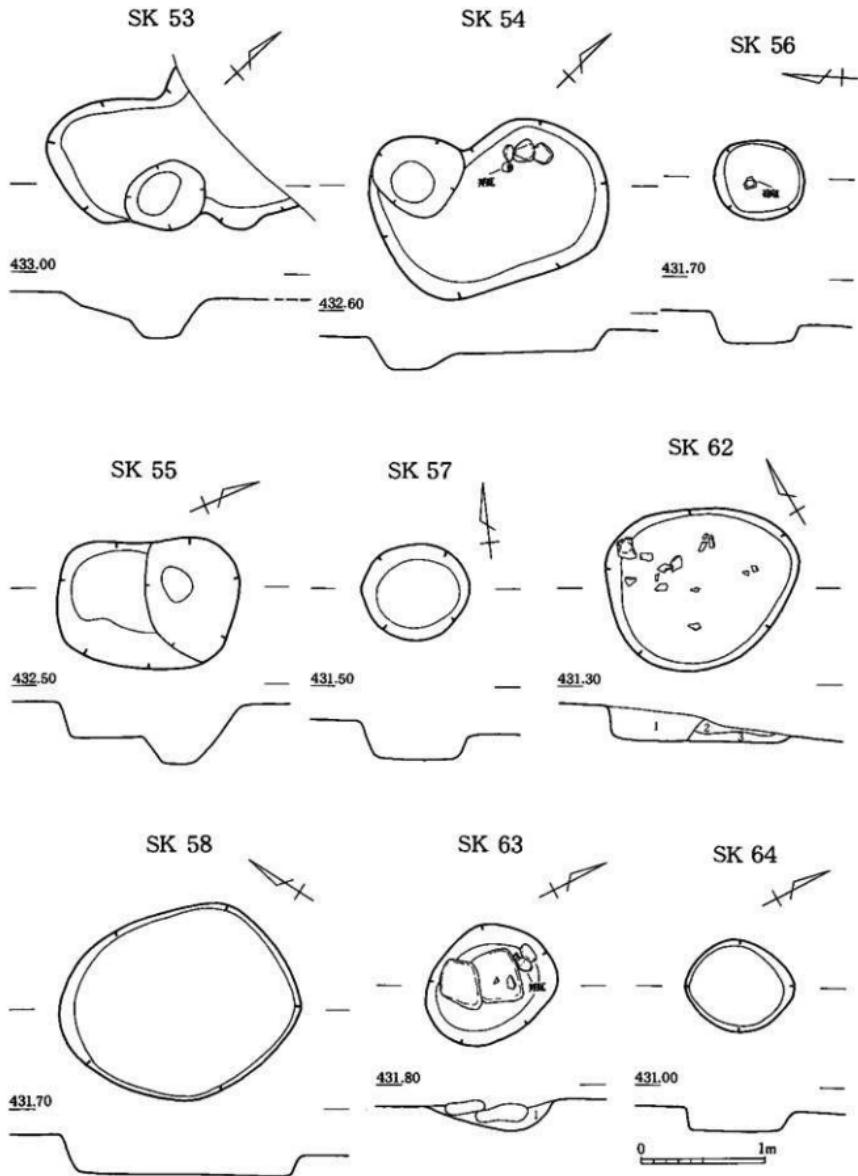


插図13 SK 35~42・44

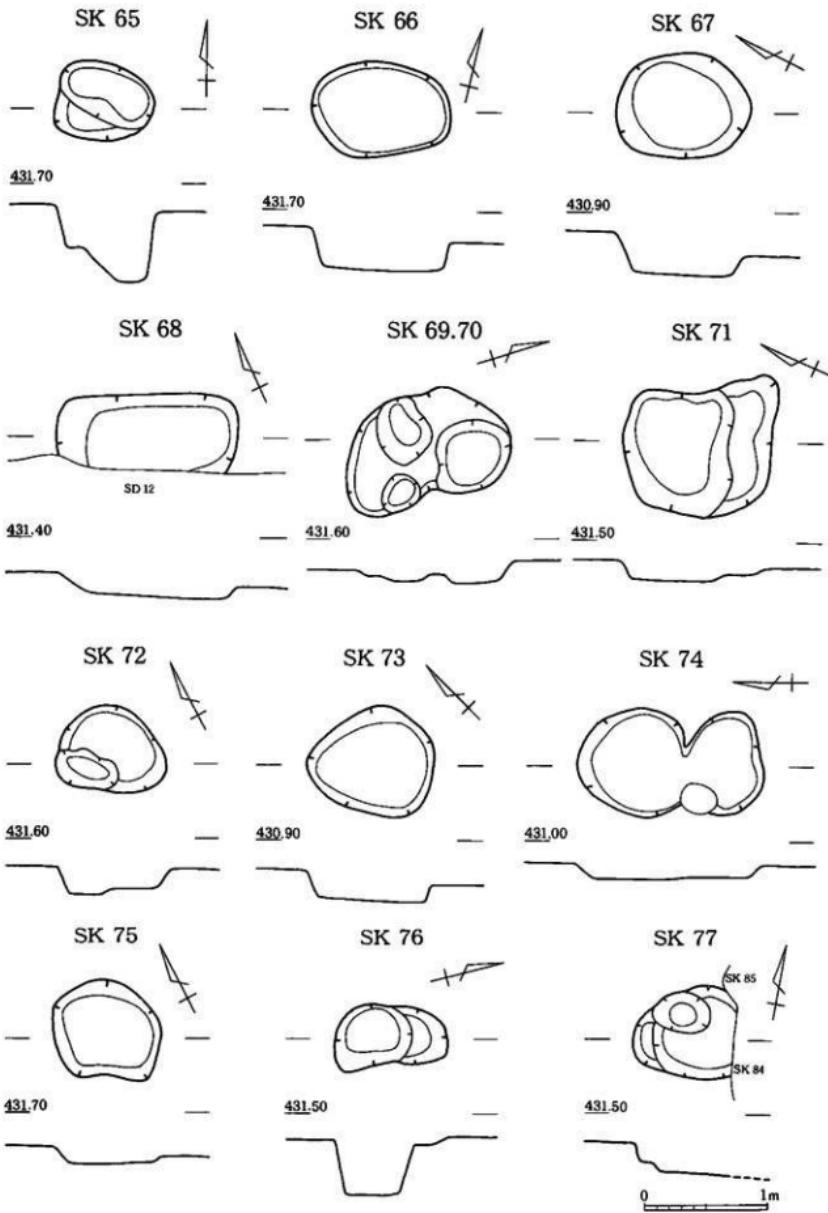


0 1m

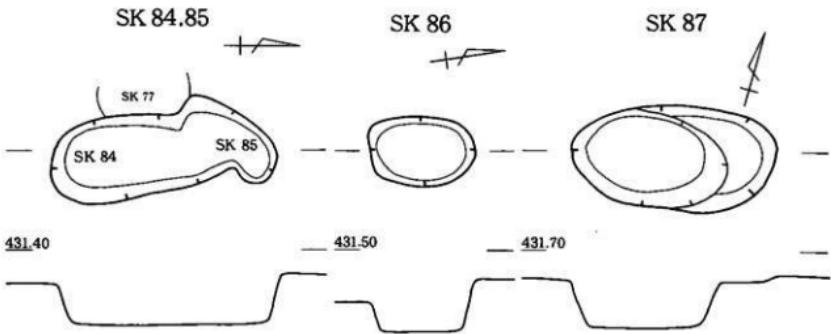
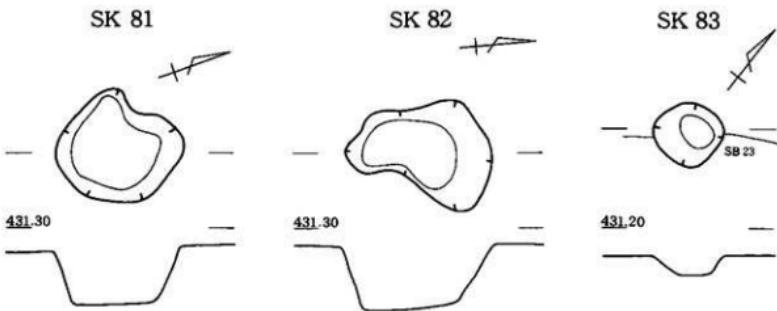
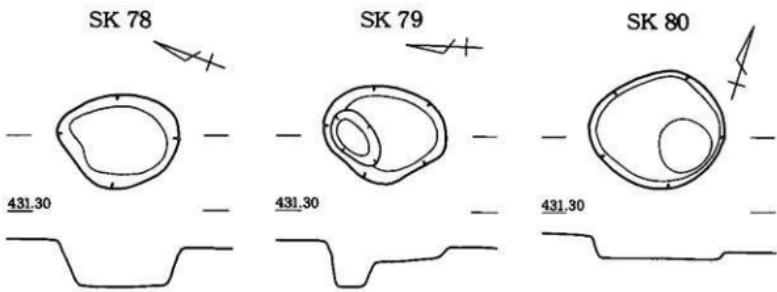
插図14 SK 43・45~52



挿図15 SK 53~58・62~64

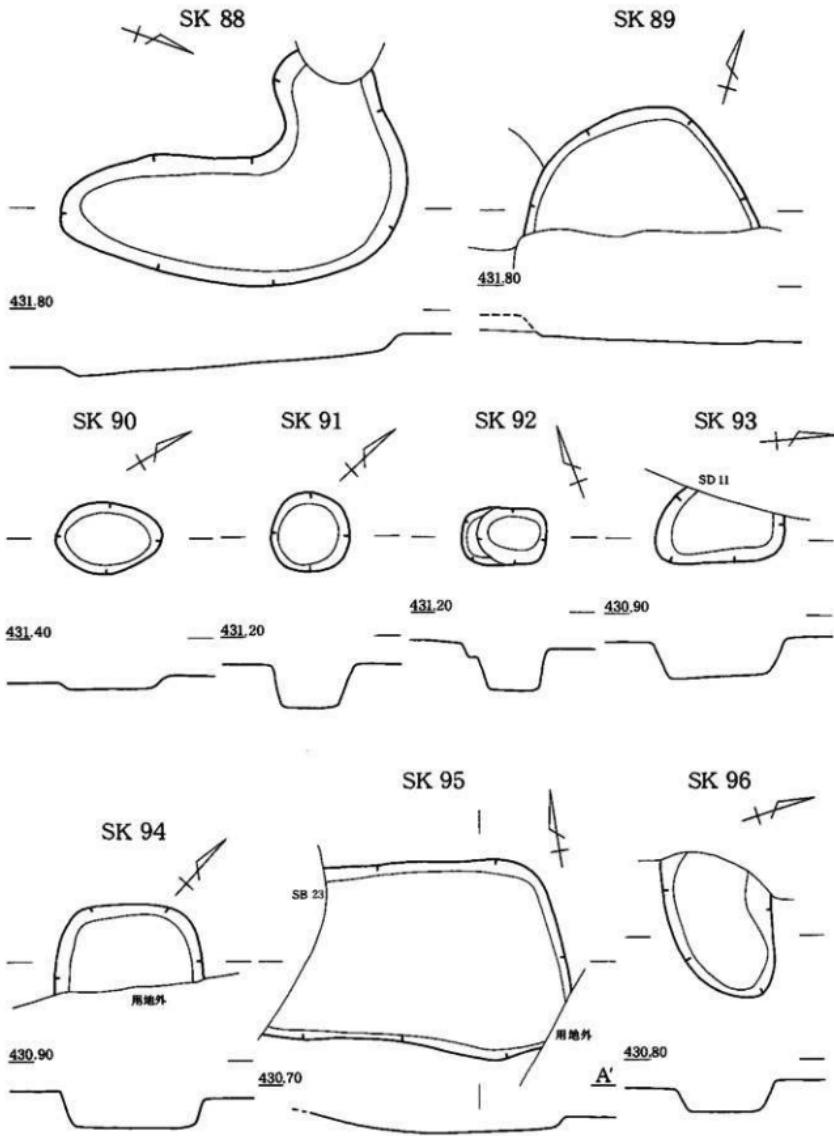


插図16 SK 65~77

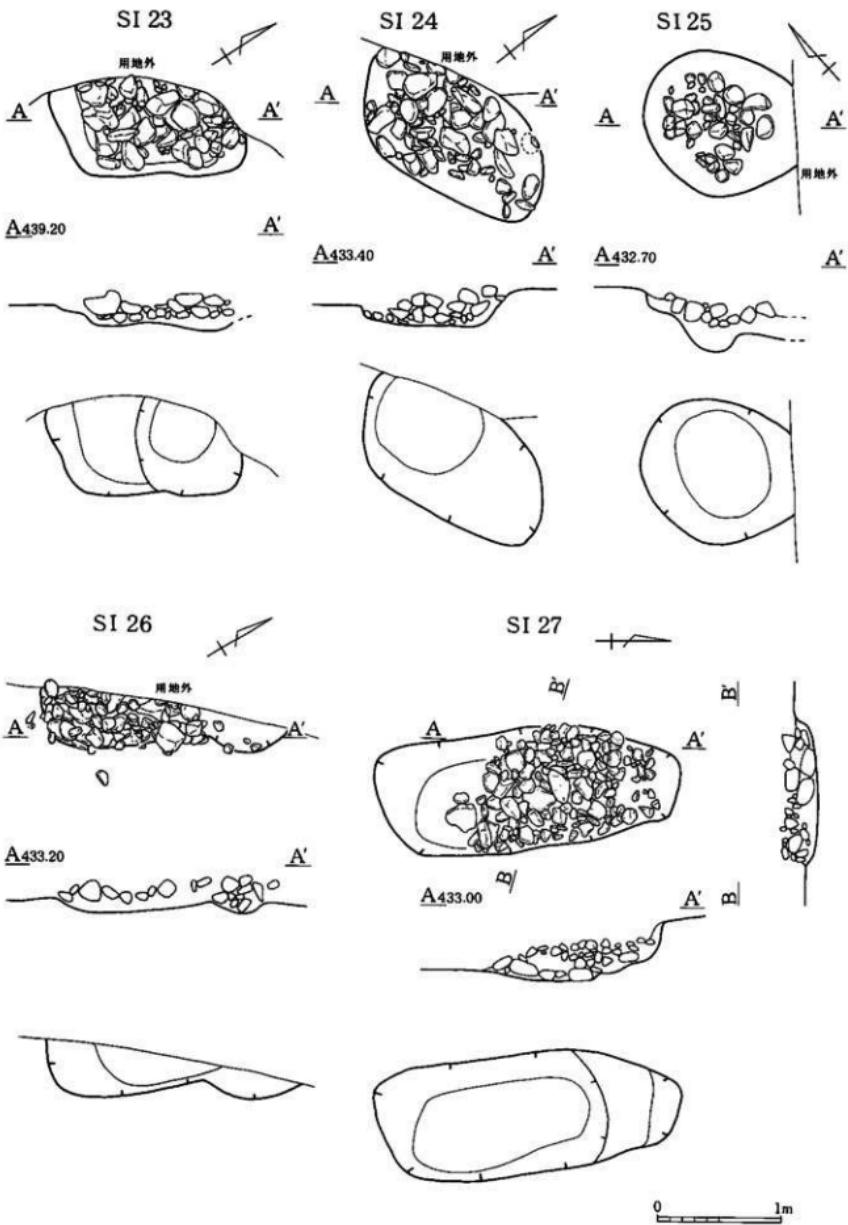


0 1m

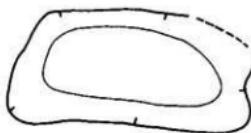
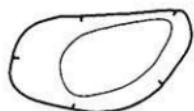
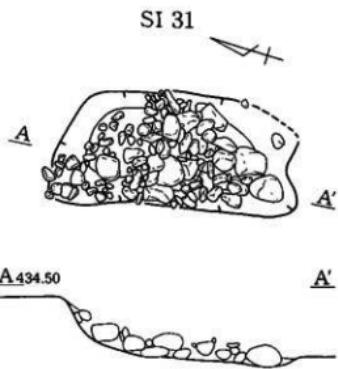
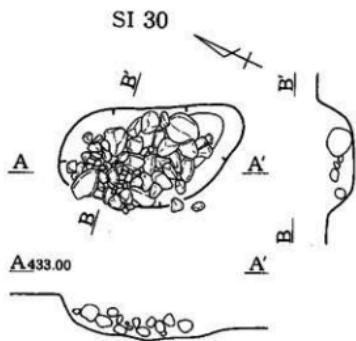
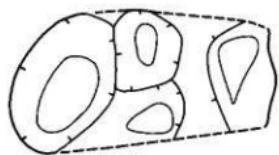
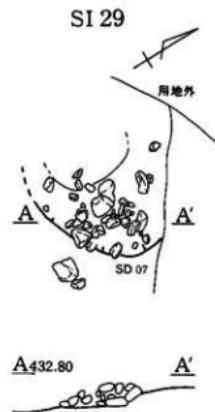
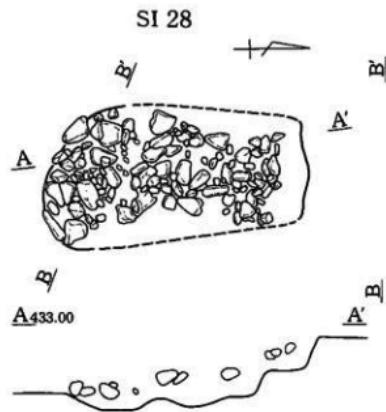
插図17 SK 78~87



插図18 SK 88~96

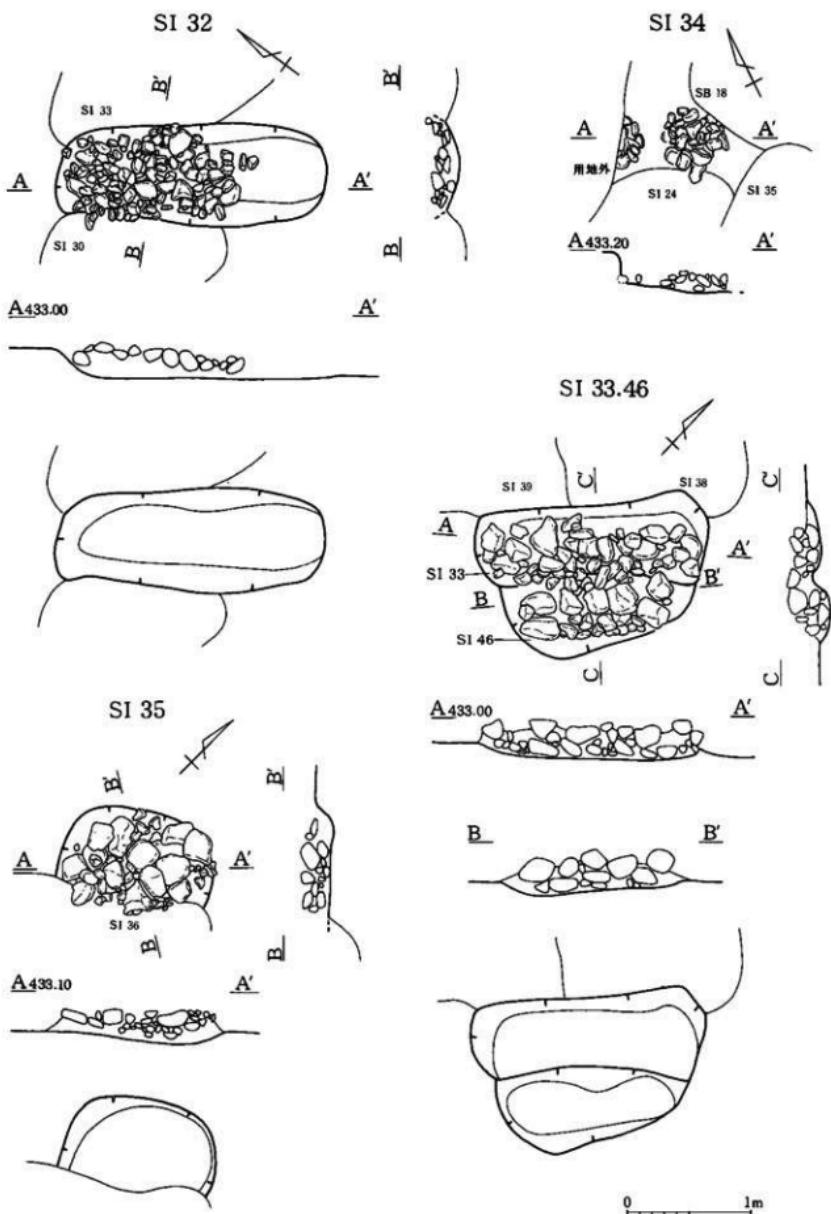


挿図19 S I 23~27

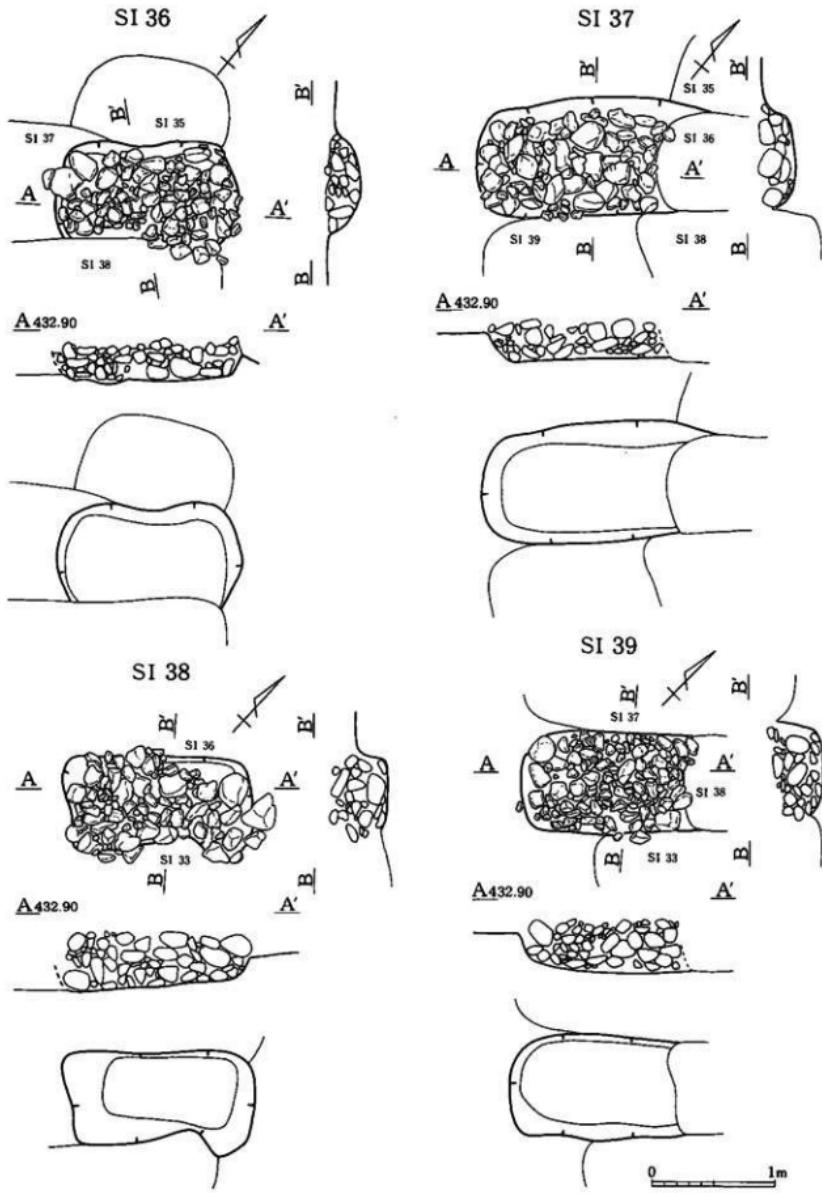


0 1m

挿図20 SI 28~31



插図21 SI 32~35・46



挿図22 S I 36~39

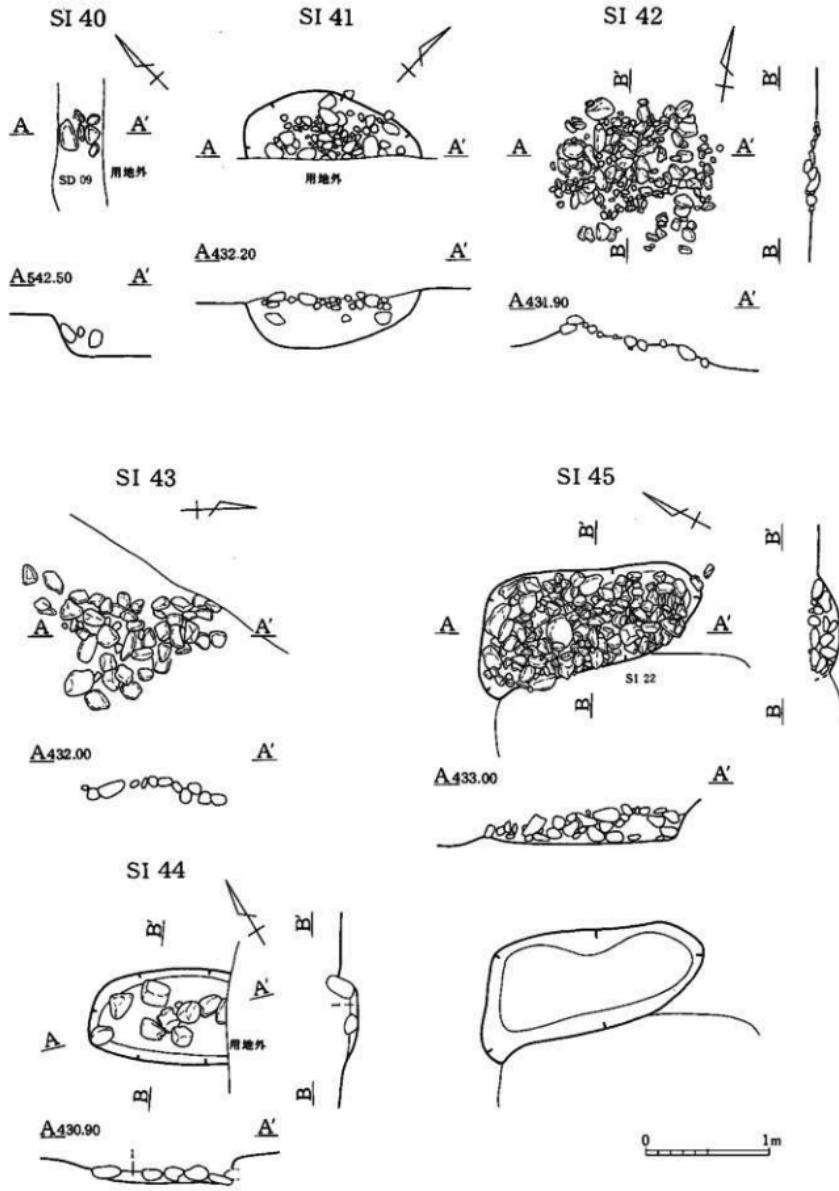
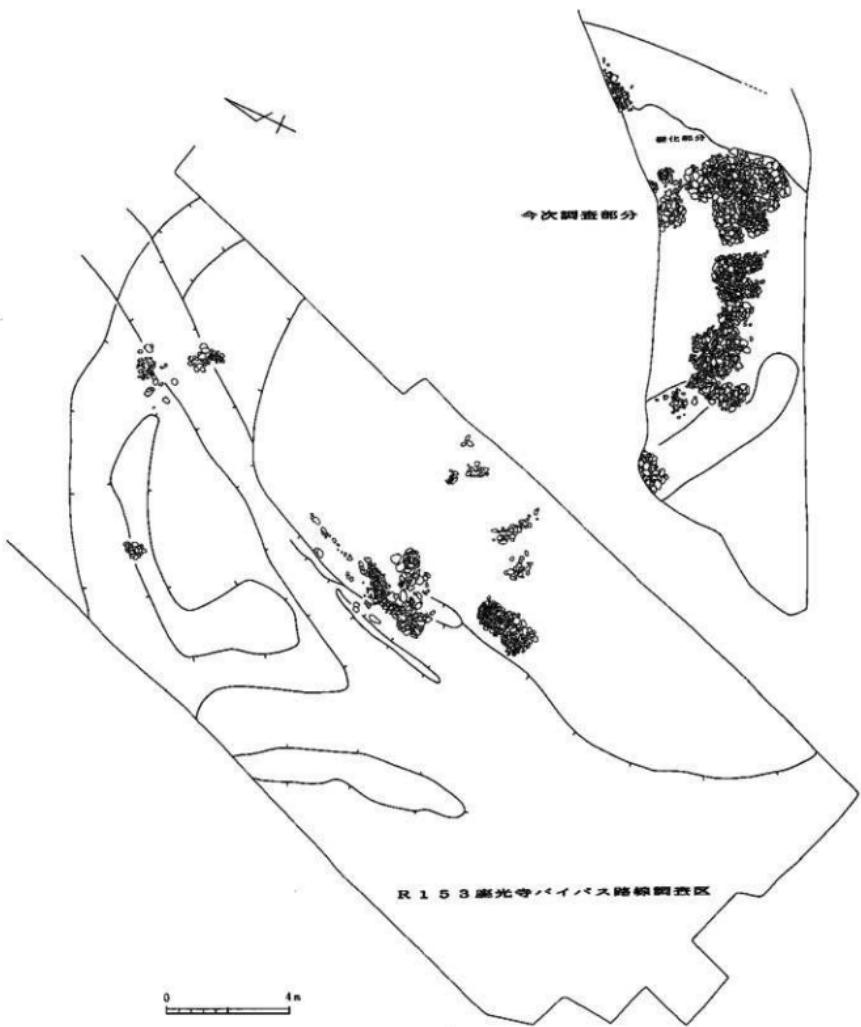
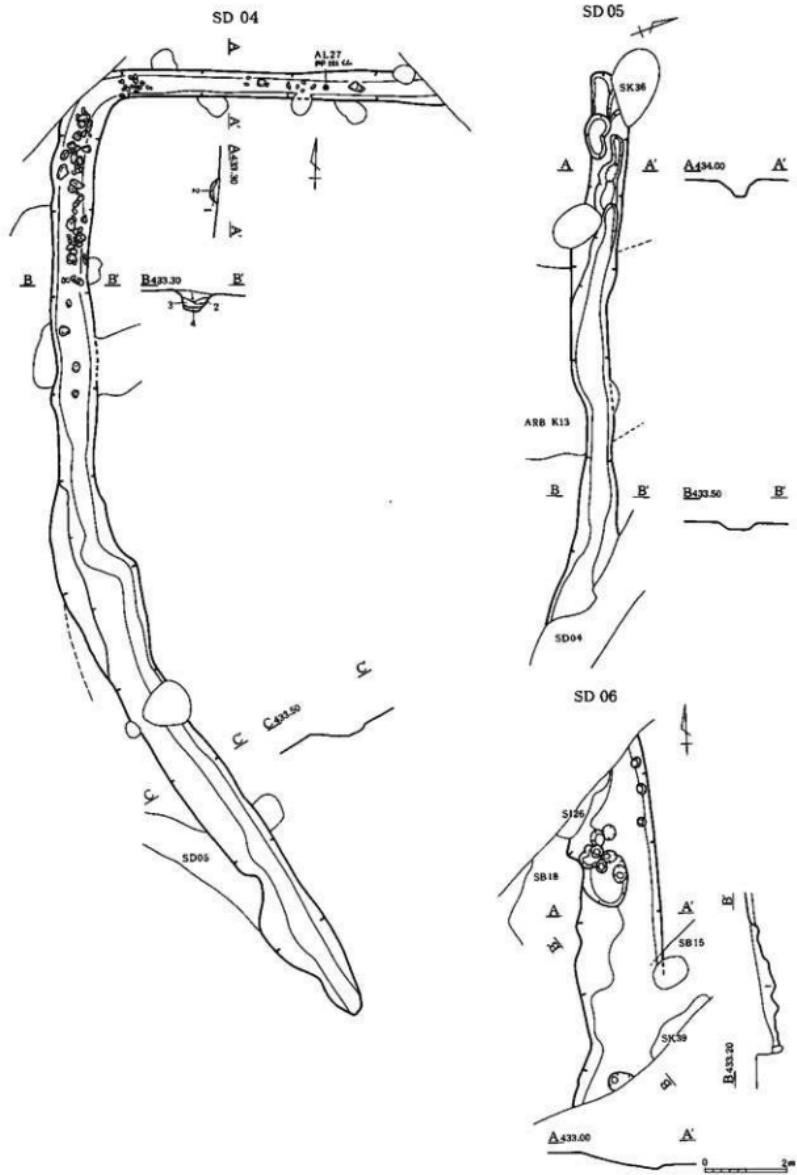


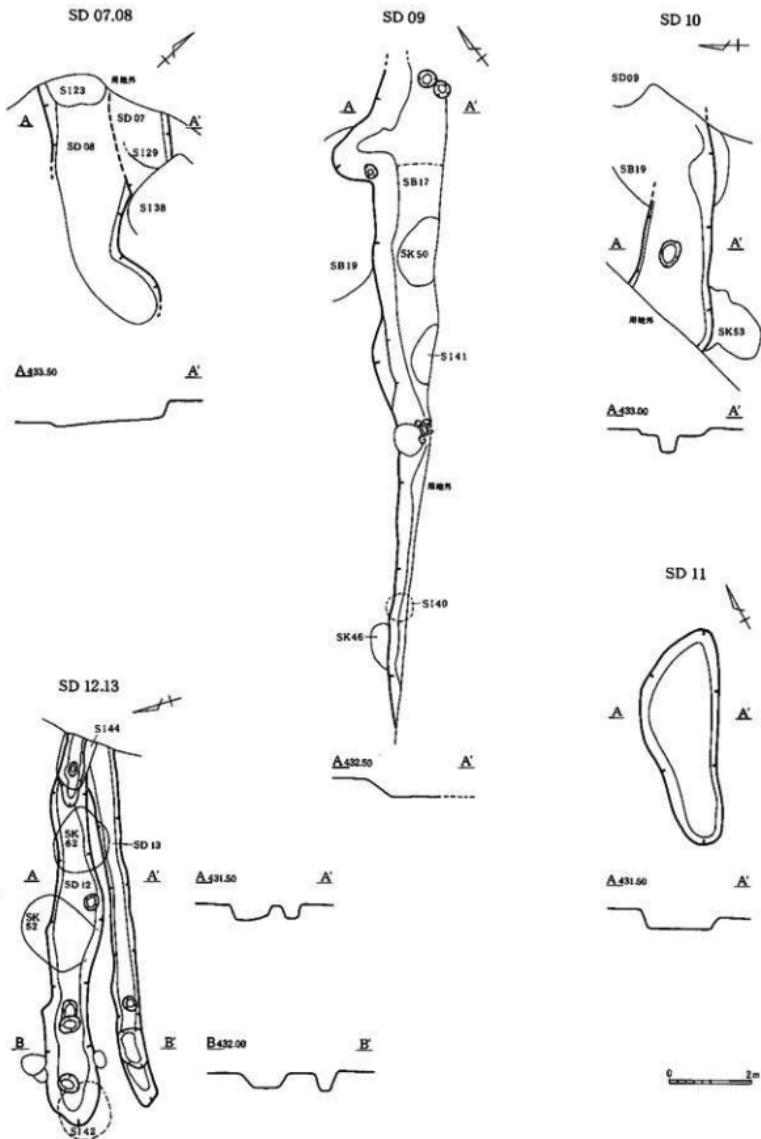
図23 SI 40~45



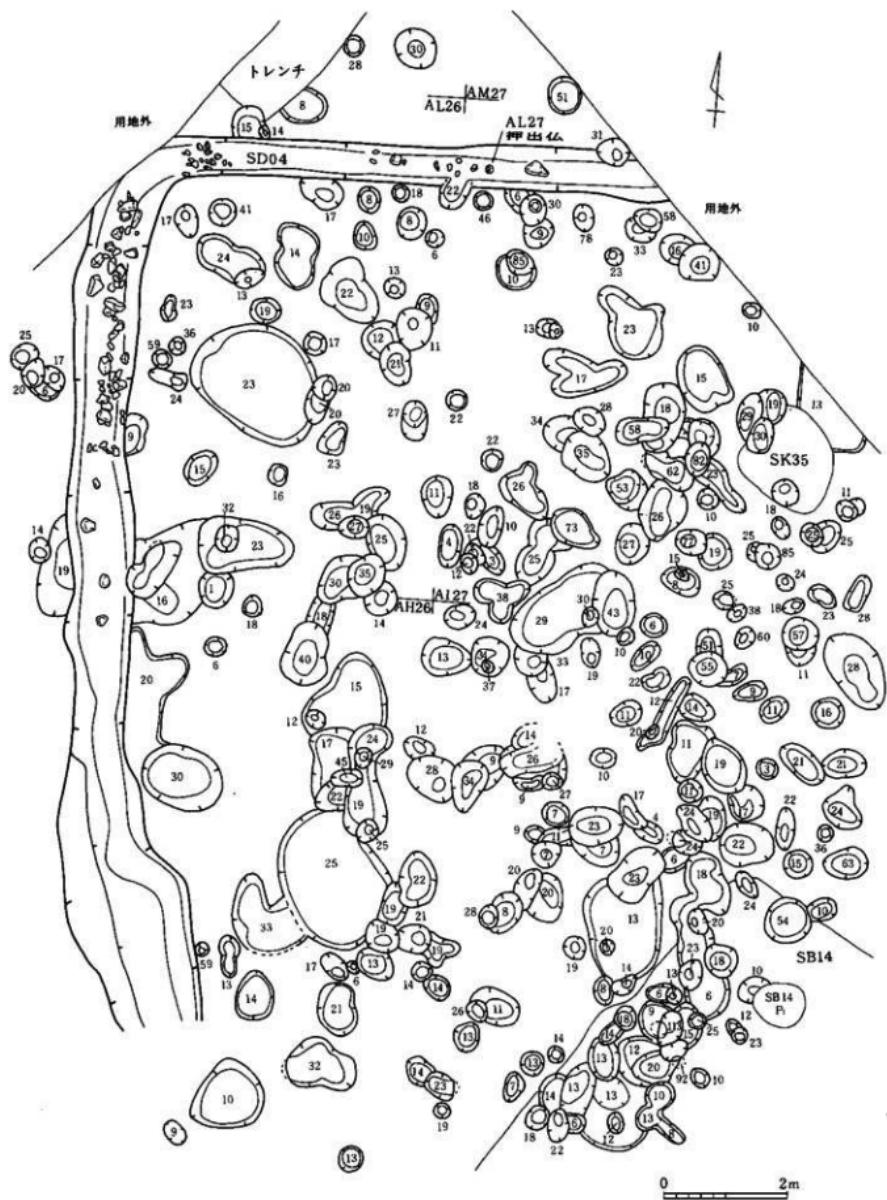
插図24 集石墓群分布状況



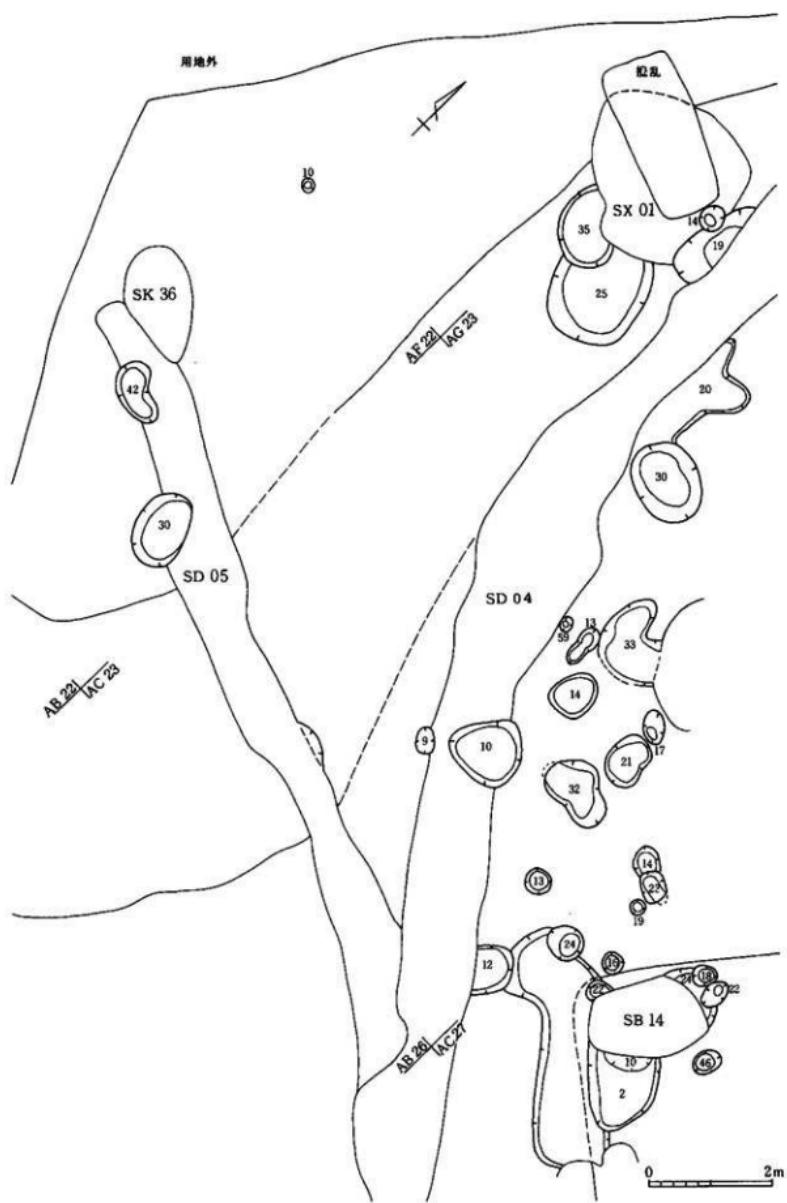
挿図25 SD 04~06



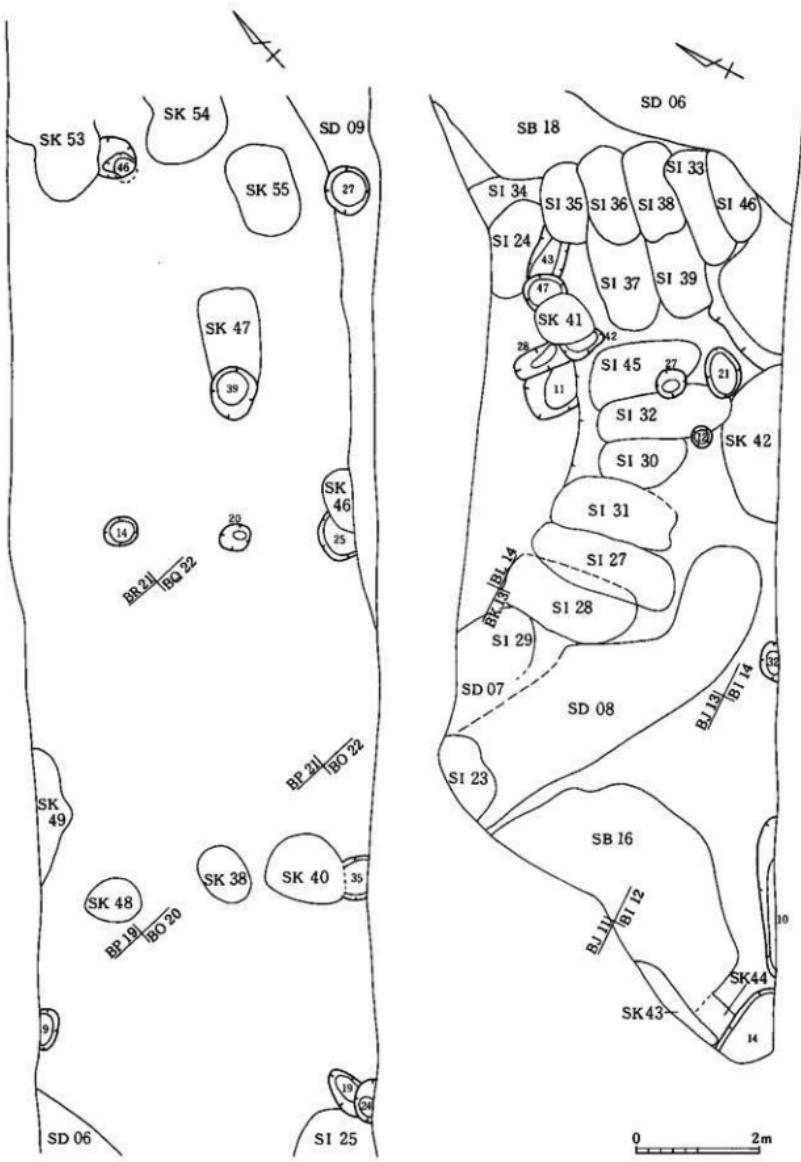
挿図26 SD 07~13



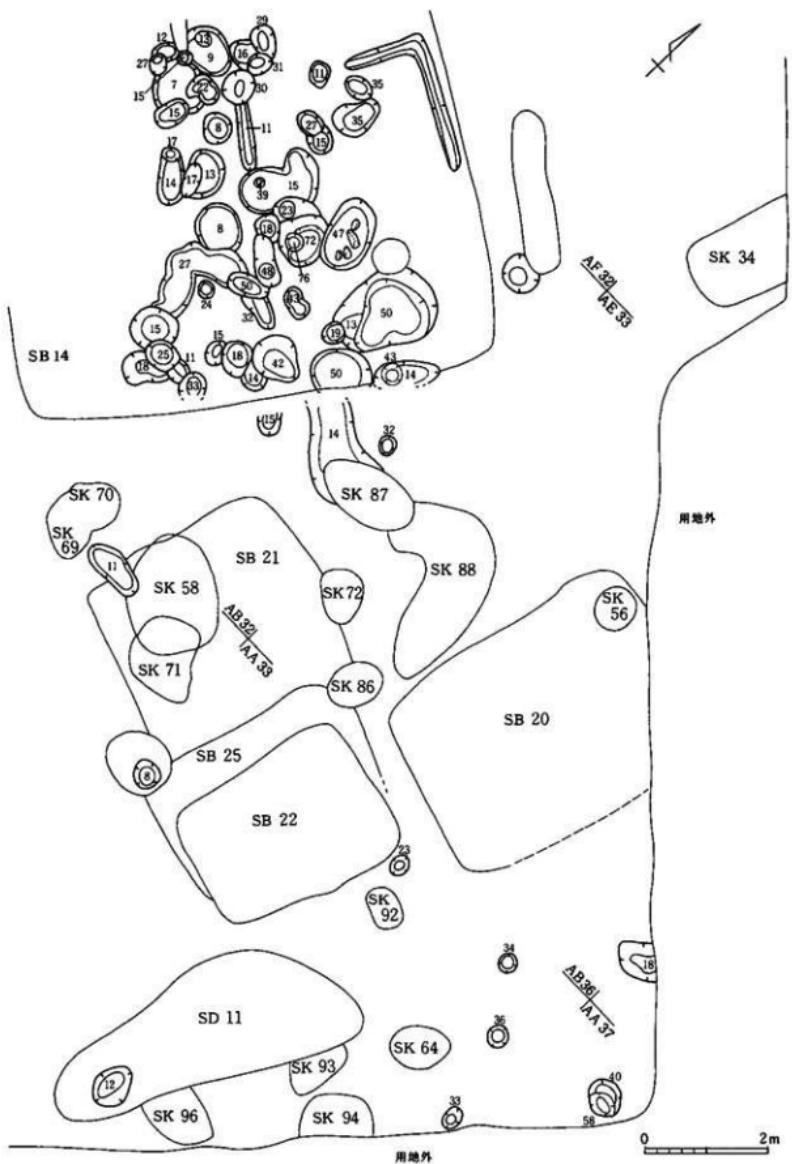
挿図27 SD04北半と小柱穴



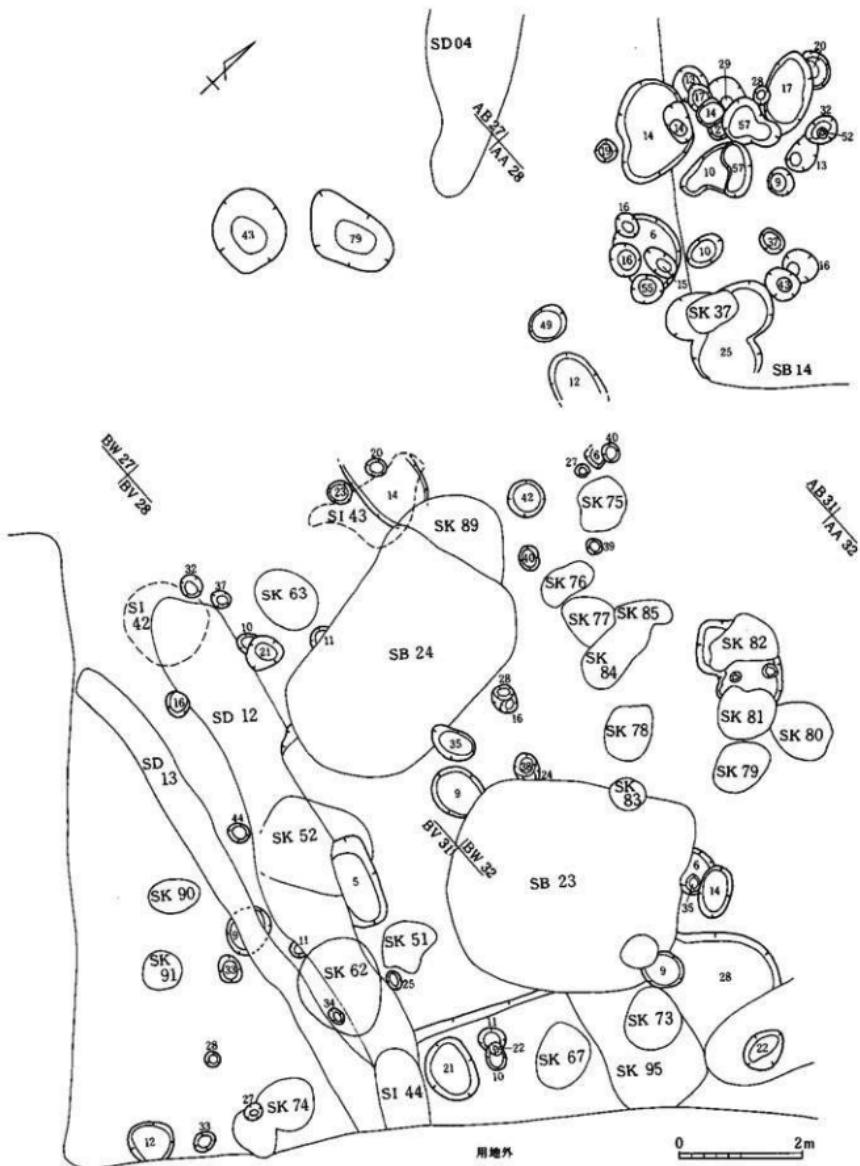
挿図28 周辺小柱穴 (1)



挿図29 周辺小柱穴 (2)



插図30 周辺小柱穴 (3)



插図31 周辺小柱穴 (4)

第IV章 総括

以上のように、新井原・石行遺跡の今次発掘調査では、縄文時代中期から中世にかけての遺構が調査された。各時期毎に総括し、まとめとしたい。

1. 縄文時代中期

隣接する一般国道153号座光寺バイパス路線内では、台地の平坦部で該期の竪穴住居址11棟が調査され、平坦部から緩斜面に移行する今次調査地点でも、居住域の一画が把握されると期待された。しかし、該期の住居址の広がりは把握されなかった。鉄塔建設用地では、微地形として北西から南東方向に下がる窪地があり、この部分での検出遺構は土坑や不整形の小柱穴のみであった。遺物も土器細片や破損した石器類が多く、こうした状況から居住域外縁の廃棄空間にあたると考えられる。これに対して、工事用道路用地では、集石（焼跡集積遺構）が散在しており、遺物もほとんど出土していないことから、調理が行なわれた場と考えられる。

このように、縄文時代の集落について個々の場の機能が把握され、集落景観をある程度復元することが可能となった。

2. 古墳時代

歴史環境で触れたように、今次調査地点は新井原11号古墳・同13号古墳に隣接する位置である。特に工事用道路用地は新井原11号古墳の墳丘にかかり、バイパス路線内で検出された周溝に今次調査のSD06・SD08が連続する位置にあり、ほぼ円形を呈する。規模は周溝の内法で約23m、外側で約29mを測る。バイパス路線内の調査所見やSD08の調査状況からは、葺石や埴輪はない。また、新井原13号古墳については、鉄塔建設用地で周溝は確認できなかった。遺構外から円筒埴輪片の出土をみる。さらに、壺の一部がSK33から混入出土しており、新井原13号古墳の遺物と考えられる。

馬墓SK47は新井原11号古墳・同13号古墳を結んだ線の南東側で検出され、中間よりもやや新井原11号古墳側に偏った位置にある。現在飯田市内では27体の古墳時代の殉葬馬の調査例があり、ほとんどが5世紀後半代の古墳とされる。しかし、新井原11号古墳が横穴式石室をもっていたとされる（下伊那誌編纂會 1955）ことから、新井原13号古墳に伴なうのではないかと考える。

飯田下伊那で5世紀代の古墳に馬が殉葬されることについては、畿内の大和政権と結びついた馬匹生産が指摘されている（小林 1994）。

この時期（5世紀後半）には竪穴住居址（SB14）が構築されるなど、新井原・高岡古墳群の東側に居住域が展開していたと考えられる。

3. 平安時代

9世紀後半には、鉄塔建設部分東側の狭い範囲内に4棟の住居が密集しており、相当規模の集落が新井原古墳群の南東側に展開すると考えられる。これ以降には住居が確認されないことから、居住域が移動したことが予想される。

今次調査の成果の一つとして、9世紀後半～10世紀にかけての墳墓群が調査されてことがあげられる。副葬された遺物から、土葬墓群は9世紀後半、火葬墓群は10世紀まで下る可能性が指摘されている。また、本遺跡では以前に今次調査地点付近で耕作中に火葬墓が発見されている。藏骨器が焼けた平石の上部に置かれ、石の下には約10cmほどの灰と炭の層、石と藏骨器との間に約1cmの同様の層があった。藏骨器内部には焼骨が納められ、須恵器壺。土師器壺が蓋として被せられていた。藏骨器は、灰釉陶器短頸壺で、10世紀代の猿投産と考えられている。以上の遺物の年代観から、土葬墓から火葬墓への変遷が考えられる。

さらに、特記される遺構・遺物として、長方形の区画施設（ないし雨落ち溝）と考えられるSD04北半と小柱穴群、そしてSD04から出土した押出仏がある。SD04の北半と小柱穴群からは、一般村落内に建てられた寺院址の可能性が考えられる。また、押出仏の出土は、以下の4点で注目される。まず、県史跡高岡1号古墳をはじめ高岡・新井原古墳群と近接すること、第2に本遺跡の南西側に古代伊那郡衙が位置すること、第3に寂光寺との関連、第4にSD04の年代が上記火葬墓群とほぼ同時代と考えられること、である。第1・2点目が地理的な位置関係、第2点目が遺物の製作年代、第3・4点目が出土遺構の年代観との関連である。

第1点は、古墳群を築造した勢力が古墳の築造を止め、代わりに寺院を建立した可能性を示唆する。今次調査ではこれを示唆する遺構・遺物はないが、これまでに本遺跡では古瓦が出土しており、氏寺的な寺院の存在が考えられる。古瓦が市内では川路・竜丘・松尾・座光寺地区から出土し、なかで竜丘・座光寺には古寺院の存在が指摘されている（小林 1995）。また、飯田市竜丘前林廃寺からは須恵器版に線刻された仏像画が、宮洞窯址付近から塙仏が出土している。塙仏は押出仏と同様の使用法がなされるもので、両者ともどちらかというと官寺よりも氏寺クラスの寺院からの出土が多い（織田顯行氏のご教示による）ようである。さらに、妙前大塚古墳の眉庇付冑・畔地1号古墳の銀製長鎖式垂飾、上溝天神塚古墳の帶金具垂飾品（渋谷 1992）等、飯田市内の古墳出土の副葬品に中央政権との密接な関係を示す優品が多いことからすれば、本遺跡の押出仏も古墳築造から氏寺建立の流れの中で理解することが可能かもしれない。

第2点目は、押出仏の製作された7世紀末ないし8世紀初頭頃と、古代伊那郡衙の時期がほぼ合うという点で連想される事柄である。律令制では、郡衙と郡寺ともいべき寺院をもって民衆統治を行なっているといわれる。伊那郡衙では、正倉群の一画は把握されたものの、他の諸施設は把握されておらず、寺院の存在も古瓦出土以外に考古学的な痕跡がないのが現状である。古代日本の地方統治制度を確立する初期の段階では、郡司のその地方における伝統的な支配力が利用されたこと（山中・佐藤 1985）から、統治制度の一端を担う寺院も、地方豪族の氏寺に依存していたと考えられる。押出仏もおそらくこうした状況下で当地方に伝来したと考えられ、製作後それほど間を置かなかったであろう。

第3点目は、『日本三代実録』貞觀8（866）年2月の信濃国伊奈郡寂光寺ほか4寺を定額寺とした記事との関連である。定額寺が瓦葺きの建物と考えられること（上田市立信濃國分寺資料館 1990）から、SD04北半と小柱穴群から想定される建物は、やはり直接結びつくものではない。余談になるが、定額寺が地方豪族の私寺を国家の統制下に組み入れ官寺としたものであるという点からすれば、第2点目と同一の内容を示す。しかし、郡衙の年代観とのずれがあり、実質的には郡衙成立時に統治制度への取り込まれていたものが、9世紀後半に「官稻の支給や墾田地の私的な土地所有が優先的に認められるなど

の」（同前）数々の特権が与えられたと考えたほうが妥当だろう。

第4点目は、本遺跡が平安時代には郡衙の役人達の墓所であったという評価、それに本地方への仏教の浸透の問題に關わる。役人達の墓所については、土葬墓・火葬墓に副葬されたり出土した灰釉陶器類から、強く裏付けられたという感がある。その中で、9世紀後半に墓制が土葬墓から火葬墓に移行すること、それに、押出仏が出土したSD04北半の年代が9世紀後半以降と考えられることは注目される。火葬墓への墓制の転換は、仏教の浸透と密接なつながりをもつことが指摘されている。

以上の点を概括すると、平安時代には集落景観が大きな変容をみせる。まず、9世紀後半には新井原古墳群の東縁辺に土葬墓群が、さらに東側に居住域が広がる。その後、10世紀代にかけて、寺院かと考えられる建物址と火葬墓群が展開し、居住域は今次調査区の東側に移動すると考えられる。

飯田市内では、日向田遺跡（飯田市教委 1990）・宮垣外遺跡（現在整理作業中）で、灰釉陶器長頸瓶が出土しており、状況から土葬墓に副葬されたと考えられる。日向田遺跡の場合居住域の外縁に、また、宮垣外遺跡の場合古墳時代の墳墓群の一画に土葬墓が位置する。時期的にはいずれも9世紀後半と考えられる。本遺跡や日向田遺跡では住居址と土葬墓が近接することから、被葬者はその集落内に居住していたことが考えられ、おそらく役人層が居住していた集落である。

4. 中世墳墓群

本遺跡の集石は、前述のとおり、大半が集石墓と考えられるもので、遺物から中世前半に位置づく。そこまで、飯田下伊那地方の中世墳墓の調査例を概観しておく。

これまで当地方では、中世の墳墓と考えられる調査例として、下伊那郡阿智村川畠遺跡（長野県教委 1971）、同北垣外遺跡（同前）、下伊那郡阿南町早稲田遺跡（阿南町教委 1983）、飯田市山本大塚（飯田市教委 1969）、同立石堂（下伊那教育会 1967）、同龍江大平遺跡（飯田市教委 1995）、同大島遺跡（下伊那考古学会 1969）、同文永寺石室・五輪塔（飯田市教委 1987）、同田井座遺跡（飯田市教委 1991）、同猿小場遺跡（飯田市教委 1980）、同清水遺跡（飯田市教委 1976）、同上の城城跡、同さつみ遺跡（長野県教委 1971）、同古屋垣外遺跡（同前）、同宮垣外遺跡、同垣外遺跡（上郷町教委 1989）、同新井原・石行遺跡（岡田 1986）、下伊那郡高森町上ノ平遺跡（高森町教委 1996）、下伊那郡松川町の場遺跡（松川町教委 1973）の諸例がある。

中世の埋葬形態として、①火葬墓（川畠遺跡、北垣外遺跡、早稲田遺跡、山本大塚、さつみ遺跡、宮垣外遺跡、新井原・石行遺跡、上ノ平遺跡、的場遺跡）、②火葬骨を蔵骨器に納めるもの（山本大塚、立石堂、文永寺石室・五輪塔、上の城城跡、新井原・石行遺跡）、③土葬墓（龍江大平遺跡、大島遺跡、田井座遺跡、猿小場遺跡、清水遺跡、さつみ遺跡、古屋垣外遺跡、垣外遺跡、新井原・石行遺跡、上ノ平遺跡）があり、いずれも掘り方長方形ないし梢円形で、上部に礫を伴なうもの（北垣外遺跡、早稲田遺跡、山本大塚、龍江大平遺跡、大島遺跡、文永寺石室・五輪塔、清水遺跡、上の城城跡、さつみ遺跡、古屋垣外遺跡）、側壁および底部に礫を伴なうもの（川畠遺跡、山本大塚、立石堂、文永寺石室・五輪塔、上の城城跡、さつみ遺跡、古屋垣外遺跡、新井原・石行遺跡）と伴なわないもの（早稲田遺跡、田井座遺跡、さつみ遺跡、古屋垣外遺跡、新井原・石行遺跡、的場遺跡）がある。錢貨が副葬されていたのは、北垣外遺跡、早稲田遺跡、山本大塚、龍江大平遺跡、文永寺石室・五輪塔、田井座遺跡、清水遺跡、さつみ遺跡、新井原・石行遺跡、上ノ平遺跡、的場遺跡で、錢種は唐～明錢であるが、当時の錢貨

の流通事情を考慮するとき、鋳造年代が遺構の年代決定の決め手とはならない。蔵骨器や副葬される陶器類から年代がわかる文永寺石室五輪塔例や山本大塚例から、15世紀前半に墓制と錢貨との結び付きが指摘されている（宮沢 1996）。六道思想の本地方への定着がこの時期とされることから、錢貨を伴なう火葬墓・土葬墓調査例の大半は15世紀以降と考えて差し支えなかろう。

本遺跡の集石墓群と形態を同じくする例は少ないが、諏訪郡下諏訪町殿村・東照寺址遺跡（下諏訪町教委 1990）の第III区集石土壙墓群が挙げられる。その形態的特徴として、長辺 1.2m・短辺 1.2m 程度の長方形ないし梢円形の掘り方をもち、火葬骨を伴なうものが多いが、火葬骨が検出されず土葬墓と考えられるものもある。前者は、下部に火葬骨を入れ上部に礫を集積するもの、火葬骨を納めた蔵骨器を掘り方に据え周囲と上部に礫を集積するものがある。後者は第22号集石土壙墓例で、本遺跡と同様底部まで多量の礫が混入している。また、経石が副葬される例として、『丸石』・『小丸石』を多量に出土したとされる上ノ平遺跡の火葬墓・土葬墓群や、写経石を副葬品として伴なう殿村・東照寺址遺跡集石土壙墓群がある。本遺跡の遺物から得られた年代観からすると、集石墓は錢貨を副葬する墓より先行すると考えられ、とすると、六道思想定着以前には経石を副葬する葬送儀礼があったのかもしれない。殿村・東照寺址遺跡集石土壙墓群の造墓時期が、出土遺物から13~14世紀とされることもこうした考え方の裏づけとなろう。出土経石1117点についてみると、長辺1.4~15.8cm（平均3.1cm）、短辺0.9~12.4cm（平均2.3cm）、厚さ0.3~4.1cm（平均1.0cm）、1.0~800gの梢円ないし円形を呈するものが多く、石材は、硬砂岩933点（83.5%）、緑色岩71点（6.4%）、チャート16点（1.4%）、その他97点（8.7%）となっている。あるいは、これまで『経塚』とされてきたものの中には、本遺跡のように中世前半の墳墓群があるかもしれない。

前述のとおり、集石墓にはいくつかのまとまりがあり、それぞれ長軸方向に偏りがある。大きなまとまりとして、S I 27・28・30~32・45、S I 33・35~39・46がある。後者はS I 36~39にみられるように、同じ形態的特徴をもつ集石墓が密接しており、近接した時に同じ系統の人々によって造墓された結果とみることができる。それはおそらく家族ないし一族の墓所であろう。また、S I 35~39北東側、S D 06上部で検出されたS B 18は底面が極めて硬く締まっていてことから、堅穴ではなく墓道の可能性がある。類例は、殿村・東照寺址遺跡に墓道と考えられる硬面がある。

以上、中世前半期の、野辺の送りの情景を描く手懸かりが得られたことは、大きな成果の一つと言える。

巷間では『和同開珎』よりも古い『富本銭』が話題となっており、本遺跡の北側約350mには『富本銭』出土に沸いた下伊那郡高森町武陵地1号古墳がある。併せて、恒川遺跡群での『和同開珎』銀銭や、本遺跡の押出仏出土を考える時、本遺跡が非常に重要な遺跡であることは疑いない。今後、今次調査地点周辺での保護に弛まなく取り組むこと、そして本報告書が活用されること、このことこそが、今次調査を活かす方途であろう。

《引用・参考文献》

[第II章関係]

- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
飯田市教育委員会 1988 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会 1990 『高岡遺跡 一高岡3・4号古墳-』
飯田市教育委員会 1991 a 『恒川遺跡群 新屋敷遺跡』
飯田市教育委員会 1991 b 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会 1991 c 『高岡遺跡 一新井原18号古墳-』
飯田市教育委員会 1992 a 『北本城々跡』
飯田市教育委員会 1992 b 『恒川遺跡群 白山遺跡』
飯田市教育委員会 1993 『恒川遺跡群 恒川A地籍』
飯田市教育委員会 1994 『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』
飯田市教育委員会 1996 『上野遺跡・金井原瓦窯址』
飯田市教育委員会 1997 『大井遺跡 大久保遺跡』
飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』
飯田市教育委員会 1998 『ナギシリ1号古墳』
飯田市教育委員会 1982~97 『恒川遺跡群範囲確認調査概報』
今村善興 1967 『飯田市座光寺原遺跡』『長野県考古学会誌』4号
岡田正彦 1986 『飯田市座光寺石行跡発掘調査概報』『伊那』34-6
座光寺考古学研究会 1976 『飯田市座光寺中島遺跡の調査報告』『伊那』24-3
座光寺村史刊行委員会 1993 『座光寺村史』
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』第二卷
下伊那誌編纂會 1991 『下伊那史』第一卷
鳥居龍藏 1924 『下伊那の先史及原史時代』
長野県教育委員会 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-飯田地区-昭和45年度』
長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一巻(一) 遺跡地名表』
長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全一巻(三) 主要遺跡(南信)』
宮澤恒之 1967 『飯田市中島遺跡』『長野県考古学会誌』4号
宮澤恒之 1953・54 『下伊那郡座光寺村金井原瓦窯址報告』『伊那』1-12、2-2、2-3

[第IV章関係]

- 阿南町教育委員会 1983 『早稻田遺跡』その2
飯田市教育委員会 1976 『清水遺跡』
飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』
飯田市教育委員会 1987 『重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工事報告書』
飯田市教育委員会 1990 『日向田遺跡II』

- 飯田市教育委員会 1991 『田井座遺跡 一色遺跡 名古熊下遺跡』
- 飯田市教育委員会 1995 『龍江大平遺跡』
- 上田市立信濃國分寺資料館 1990 『－信濃國分寺とその時代－ 古代の寺院』
- 上郷町教育委員会 1989 『ツルサシ遺跡 ミカド遺跡 増田遺跡 堀外遺跡』
- 下伊那教育会 1967 『下伊那教育会参考館 考古資料集1』
- 下伊那考古学会 1969 『大塚』
- 下伊那考古学会 1969 『安宅・大島』
- 下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』第二卷
- 下諏訪町教育委員会 1990 『殿村・東照寺址遺跡』
- 高森町教育委員会 1996 『上ノ平遺跡』
- 長野県教育委員会 1971 「3. 川畑遺跡」・「4. 北垣外遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－阿智地区－』
- 長野県教育委員会 1971 「4. さつみ遺跡」・「5. 古屋垣外遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－飯田地区－』
- 松川町教育委員会 1973 『的場遺跡』
- 今村善興 1992 「高森町大島山「上の平火葬墓群」」『伊那』1992-6
- 岡田正彦 1986 「飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報」『伊那』34-6
- 小林正春 1994 「長野の古墳－下伊那の古墳時代の埋葬馬－」『日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨』
- 小林正春 1995 「前方後円墳から寺院へ－仏教の地方伝播」『図説 飯田・下伊那の歴史』
上 地土出版社
- 渋谷恵美子 1992 「松尾上溝天神塚古墳出土蒂金具垂飾品」『伊那』1992-6
- 達那真周 1967 「立石堂の火葬墓」『下伊那教育会参考館 考古資料集1』
- 山中敏史・佐藤興治 1985 『古代日本を発掘する5 古代の役所』岩波書店
- 宮澤恒之 1996 「中世出土銭資料化の試み－飯沼古銭の再検討と資料集成を通して」
『飯田市美術博物館研究紀要』6

造構名	層	J I S 標準色票	土 壤 色	土 性	しまり	粘 性	備 考
SB 14	1	10YR 2 / 2	黒褐	S i L	良	弱	
	2	10YR 2 / 3	黒褐	S i L	良	弱	
	3	10YR 3 / 2	黒褐	S i CL	良	やや強	
	4	10YR 2 / 1	黒	S i CL	良	やや強	炭化物少量混
	5	10YR 3 / 4	暗褐	S i L	良	弱	
	6	10YR 2 / 3	黒褐	S i L	良	やや強	
	7	10YR 4 / 3	にぶい黄褐	HC	良	強	
	8	10YR 2 / 2	黒褐	S i L	良	やや強	
カマド	1	7.5YR 2 / 3	極暗褐	L i C	不良	無	
	2	10YR 6 / 6	明黄褐	S i C	やや良	やや強	粘土、炭混
	3	7.5YR 3 / 3	暗褐	CL	良	無	炭・焼土含む
	4	7.5YR 4 / 3	褐	S CL	やや良	無	焼土・炭・灰を多く含む
	5	7.5YR 3 / 2	黒褐	S i C	不良	やや強	炭小粒をわずかに含む
SB 20	1	7.5YR 2 / 2	黒褐	S i CL	良	無	
	2	10YR 4 / 3	にぶい黄褐	S i CL	極良	無	
	3	7.5YR 2 / 1	黒	S i CL	良	無	
	4	7.5YR 3 / 2	黒褐	S i CL	不良	無	
カマド	1	7.5YR 2 / 3	極暗褐	S i CL	良	弱	焼土混
	2	7.5YR 3 / 2	黒褐	S i CL	不良	無	焼土微量混
	3	7.5YR 4 / 6	褐	HC	良	無	粘土
	4	焼土					
SB 21		-	-	-	-	-	
SB 22		7.5YR 2 / 1	黒	S i CL	やや良	弱	
カマド	1	7.5YR 2 / 1	黒	S i C	不良	無	
	2	7.5YR 3 / 1	黒褐	S i C	不良	弱	焼土混
	3	5YR 3 / 2	暗赤褐	S i C	不良	無	焼土を多く含む
	4	7.5YR 4 / 4	褐	S i CL	やや良	やや強	
	5	7.5YR 3 / 2	黒褐	S i C	やや良	無	
SB 23		7.5YR 3 / 1	黒褐	S i CL	やや良	弱	
カマド	1	7.5YR 3 / 1	黒褐	S i CL	やや良	無	
	2	7.5YR 2 / 2	黒褐	S i CL	やや良	無	焼土微量
	3	7.5YR 4 / 4	褐	HC	良	弱	粘土
	4	7.5YR 3 / 4	暗褐	S i C	良	無	
	5	焼土					
SB 17		7.5YR 3 / 2	黒褐	S i C	やや良	弱	

付表 1 造構土層注記 (1)

遺構名	層	J I S 標準色票	土 壤 色	土性	規模(長×幅×高、mm)	形 態	種 別	時 期
S B15		10YR 3/4	暗褐	SL	- × - × 10	不明	竪穴	不明
16		7.5YR 4/4	褐	SL	400 × - × 20	不整円形	竪穴	古墳後期
18	1	10YR 5/6	黃褐	SiL	- × - × 30	不明	竪穴	中世
	2	10YR 5/4	にぶい黄褐	CL				(あるいは墓道)
	3	10YR 4/6	褐	SiL				
19		10YR 3/3	暗褐	SL	(420) × (280) × 20	椭円形	竪穴	近世
24		7.5YR 3/2	黒褐	SiC	420 × 260 × 25	不整形	工房址?	不明
25		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	360 × (250) × 15	不整長方	竪穴	平安
S K31		5YR 3/1	黒褐	SiCL	- × 100 × 20	長方形	火葬墓	不明
32		7.5YR 2/1	黒	SL	63 × 53 × 36	椭円形	火葬墓	不明
34	1	耕土	-	-	- × 120 × 33	長方形	土葬墓	平安
	2	10YR 3/4	暗褐	SiCL				
	3	10YR 2/2	黒褐	SiL				
	4	10YR 4/4	褐	SiL				
	5	10YR 4/3	にぶい黄褐	SL				
	6	10YR 5/6	黄褐	SL				
	7	10YR 3/4	暗褐	SiL				
	8	10YR 5/4	にぶい黄褐	SiL				
35		-	-	-	- × 148 × 32	不整形	土坑	縄文中期
36		-	-	-	- × 108 × 49	椭円形	土坑	縄文中期
37		-	-	-	90 × 59 × 61	椭円形	土坑	縄文中期
38		10YR 4/4	褐	SL	98 × 74 × 13	椭円形	土坑	不明
39		10YR 4/4	褐	SiL	204 × - × 43	不整形	土坑	不明
40		7.5YR 4/3	褐	SiCL	118 × 110 × 66	円形	土坑	不明
41		7.5YR 3/2	黒褐	SL	98 × 81 × 50	椭円形	土葬墓	中世
42		7.5YR 3/3	暗褐	SiCL	238 × - × 27	不明	土坑	不明
43		10YR 4/6	褐	SL	188 × - × 4	不明	土坑	不明
44		7.5YR 4/3	褐	SL	- × - × 9	不明	土坑	不明
45		10YR 3/4	暗褐	SL	85 × 75 × 25	円形	火葬墓	不明
46		7.5YR 4/3	褐	SiCL	100 × - × 25	不明	土坑	縄文中期
47		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	- × 95 × 29	長方形	馬墓	古墳?
48		7.5YR 4/3	褐	SiCL	90 × 73 × 25	円形	土坑	不明
49		10YR 3/4	暗褐	SiCL	230 × - × 21	不明	土坑	不明
50		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	175 × - × 41	不明	土坑	不明
51	1	10YR 4/2	灰黄褐	SL	103 × 90 × 40	不整形	火葬墓	平安
	2	7.5YR 3/1	黒褐	SiCL				

付表2 遺構土層注記(2)

遺構名	層	J I S 標準色票	土壤色	土性	規模(長×幅×高、mm)	形態	種別	時期
SK51	3	10YR 2/2	黒褐	SiCL				
	4	7.5YR 3/3	暗褐	SiCL				
	5	7.5YR 4/3	褐	SiCL				
	6	7.5YR 2/2	黒褐	SiC				
	7	7.5YR 2/3	極暗褐	SiC				
52		7.5YR 3/1	黒褐	SiCL	175×138×25	不整形方	馬墓	不明
53		10YR 3/4	暗褐	SL	—×100×38	不整形	土坑	不明
54		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	187×137×36	不整形	土葬墓	平安
55		10YR 3/4	暗褐	SL	144×104×47	長方形	土坑	不明
56		10YR 2/3	黒褐	SiCL	72×61×26	円形	土葬墓	平安
57		—	—		87×79×33	円形	土坑	不明
58		7.5YR 1.7/1	黒	SiC	192×155×31	椭円形	土坑	平安
62	1	7.5YR 3/2	黒褐	SiC	155×130×29	不整円形	火葬墓	平安
	2	7.5YR 2/1	黒	SiC				
	3	10YR 2/3	黒褐	SiC				
63		7.5YR 3/1	黒褐	SiCL	108×86×29	椭円形	火葬墓?	平安
64		7.5YR 2/2	黒褐	SiCL	88×70×15	椭円形	土坑	不明
65		7.5YR 2/3	極暗褐	SiCL	80×65×60	不整円形	土坑	不明
66		7.5YR 3/1	黒褐	SiCL	110×75×34	椭円形	土坑	不明
67		7.5YR 2/1	黒	SiC	106×81×35	椭円形	土坑	不明
68		7.5YR 3/1	黒褐	SiC	146×—×22	長方形?	土坑	不明
69+70		7.5YR 3/3	暗褐	SiCL	140×85×19	不整形	土坑	不明
71		7.5YR 6/6	橙	S	145×127×29	不整形	土坑	绳文中期
(プロト状遺跡)		7.5YR 2/2	黒褐	SL				
72		7.5YR 2/3	極暗褐	SiC	90×68×24	椭円形	土坑	不明
73		7.5YR 2/2	黒褐	SiCL	103×90×28	不整椭円	土坑	不明
74		—	—		151×87×29	不整形	土坑	不明
75		7.5YR 3/3	暗褐	SiC	95×82×14	不整形	土坑	不明
76		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	90×50×46	不整形	土坑	不明
77		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	—×75×27	不整形	土坑	不明
78		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	97×73×39	椭円形	土坑	不明
79		7.5YR 3/2	黒褐	SiC	97×76×37	椭円形	土坑	不明
80		7.5YR 3/3	暗褐	SiCL	106×94×16	椭円形	土坑	不明
81		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	102×90×48	不整形	土坑	不明
82		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	118×88×53	不整形	土坑	不明
83		7.5YR 3/1	黒褐	SiCL	57×48×18	円形	土坑	不明

付表3 遺構土層注記(3)

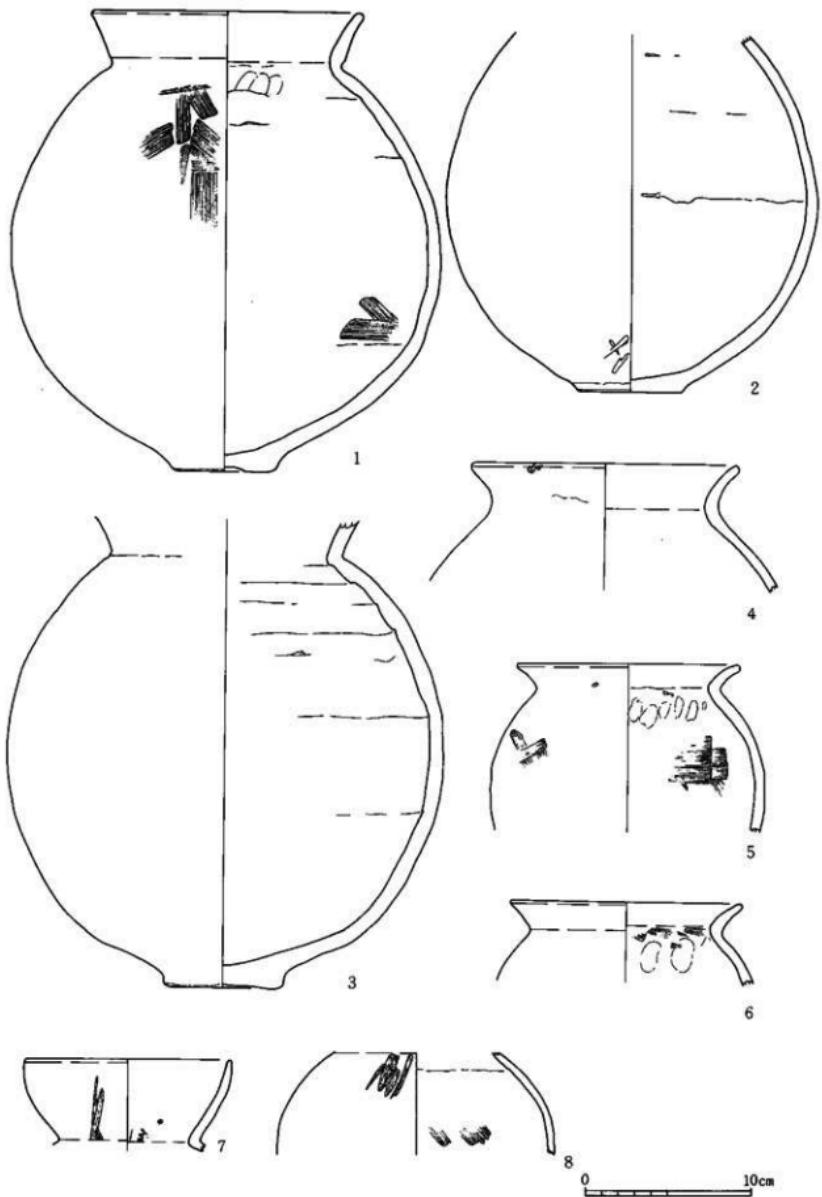
遺構名	層	J I S 標準色票	土 壤 色	土性	規模(長×幅×高、釐m)	形 態	種 別	時 期
S K84	7.5YR 3／2	黑褐	SiC	— × 70 × 38	橢円形	土坑	不明	
85	7.5YR 2／1	黑	SiC	— × 38 × 43	不整形	土坑	不明	
86	7.5YR 3／2	黑褐	SiCL	— × 38 × 43	橢円形	土坑	不明	
87	—	—	—	164 × 85 × 49	橢円形	土坑	不明	
88	—	—	—	282 × 110 × 20	不整形	土坑	不明	
89	—	—	—	185 × — × 18	不明	土坑	不明	
90	—	—	—	85 × 57 × 12	橢円形	土坑	不明	
91	—	—	—	63 × 63 × 36	円形	土坑	不明	
92	7.5YR 3／3	暗褐	SiCL	68 × 46 × 38	長方形	土坑	不明	
93	7.5YR 3／2	黑褐	SiC	103 × — × 28	不明	土坑	不明	
94	7.5YR 2／2	黑褐	SiC	120 × — × 33	不明	土坑	不明	
95	—	—	—	— × 160 × 22	長方形	土坑	平安	
96	—	—	—	— × 85 × 25	不明	土坑	不明	
S ! 23	—	—	—	155 × — × 30	不明	集石墓	中世	
24	—	—	—	160 × 90 × 30	不整長方	集石墓	中世	
25	7.5YR 3／3	暗褐	SiCL	130 × 110 × 40	円形	集石	不明	
26	—	—	—	200 × — × 26	不整長方	集石墓	中世	
27	—	—	—	242 × 95 × 33	不整長方	集石墓	中世	
28	—	—	—	212 × 105 × 27	不整長方	集石墓	中世	
29	—	—	—	— × — × 20	不明	燒鐵葉模?		
30	—	—	—	146 × 76 × 23	橢円形?	集石墓	中世	
31	—	—	—	198 × 92 × 20	不整長方	集石墓	中世	
32	—	—	—	217 × 84 × 27	長方形	集石墓	中世	
33	—	—	—	190 × — × 31	長方形?	集石墓	中世	
34	—	—	—	— × — × 15	長方形?	集石墓	中世	
35	—	—	—	123 × — × 27	方形?	集石墓	中世	
36	—	—	—	148 × — × 34	長方形	集石墓	14 + 15世紀	
37	—	—	—	— × 94 × 32	長方形	集石墓	中世	
38	—	—	—	152 × 74 × 47	長方形	集石墓	中世	
39	—	—	—	— × 84 × 43	長方形	集石墓	中世	
40	—	—	—	— × — × 23	不明	集石	不明	
41	—	—	—	142 × — × 43	円形?	燒鐵葉模	繩文	
42	—	—	—	— × — × —	円形	集石	不明	
43	—	—	—	— × — × —	不明	集石	不明	
44	7.5YR 2／2	黑褐	SiC	— × 77 × 25	橢円形?	集石	不明	
45	—	—	—	183 × 83 × 30	不整長方	集石墓	中世	

付表4 遺構土層注記(4)

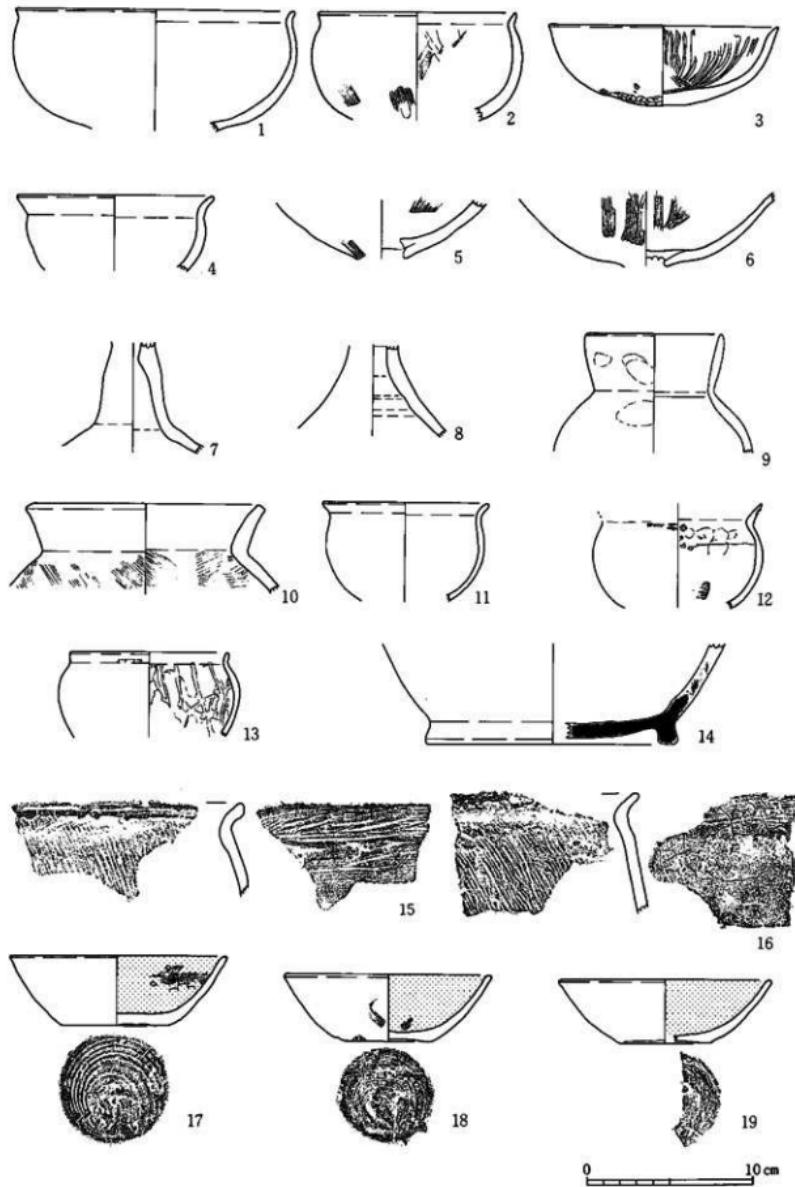
遺構名	層	J I S 標準色票	土壤色	土性	規模(長×幅×高、釐メ)	形態	種別	時期
S I 46		-	-	-	152×68×33	長方形?	集石墓	中世
S D 04	A1	10YR 3/1	黒褐	S	北半幅60~100、深40 南側幅 120、深50	鍵の手状	溝址	平安
	2	10YR 3/4	暗褐	SiCL		やや湾曲		
	B1	10YR 3/3	暗褐	SiC				
	2	10YR 3/1	黒褐	SiC				
	3	10YR 4/3	にぶい黄褐色	CL				
	4	10YR 2/1	黒	SL				
05		10YR 2/3	黒褐	L	-×110×40	直線状	溝址	不明
06	B1	10YR 3/4	暗褐	SiL	-×220×50	やや湾曲	溝址	不明
07		7.5YR 3/4	暗褐	SL	-×(140)×-	-	溝址	古墳後期
08		-	-	-	-×(200)×-	-	溝址	不明
09		10YR 3/3	暗褐	SL	-×-×40	直線状	溝址	不明
10		7.5YR 4/3	褐	SL	-×170×30	湾曲?	溝址	不明
11		7.5YR 2/2	黒褐	SiCL	510×190×40	草鞋状	溝状址	平安
12		7.5YR 3/2	黒褐	SiCL	-×130×40	ほぼ直線	溝址	中世?
13		-	-	-	-×70×50	ほぼ直線	溝址	中世?
S X 01	1	10YR 3/3	暗褐	SL	-×240×58	不整形	工房址?	平安
	2	10YR 4/3	にぶい黄褐色	SL				
	3	10YR 3/4	暗褐	SiCL				
	4	10YR 2/2	黒褐	SiC				
	5	10YR 3/3	暗褐	LiC				
	6	10YR 2/2	黒褐	LiC				
	7	10YR 4/6	褐	HC				
	8	10YR 3/4	暗褐	LiC				

基本層序	層	J I S 標準	土壤色	土性	しまり	粘性	備考
	I	-	-	-	-	-	耕土および擾乱
	II	10YR 6/8	明黃褐	SL	不良	無	
	III	10YR 3/4	暗褐	SiCL	良	やや強	
	IV	10YR 2/2	黒褐	SIL	良	弱	
	V	10YR 4/3	にぶい黄褐色	SiL	良	やや強	

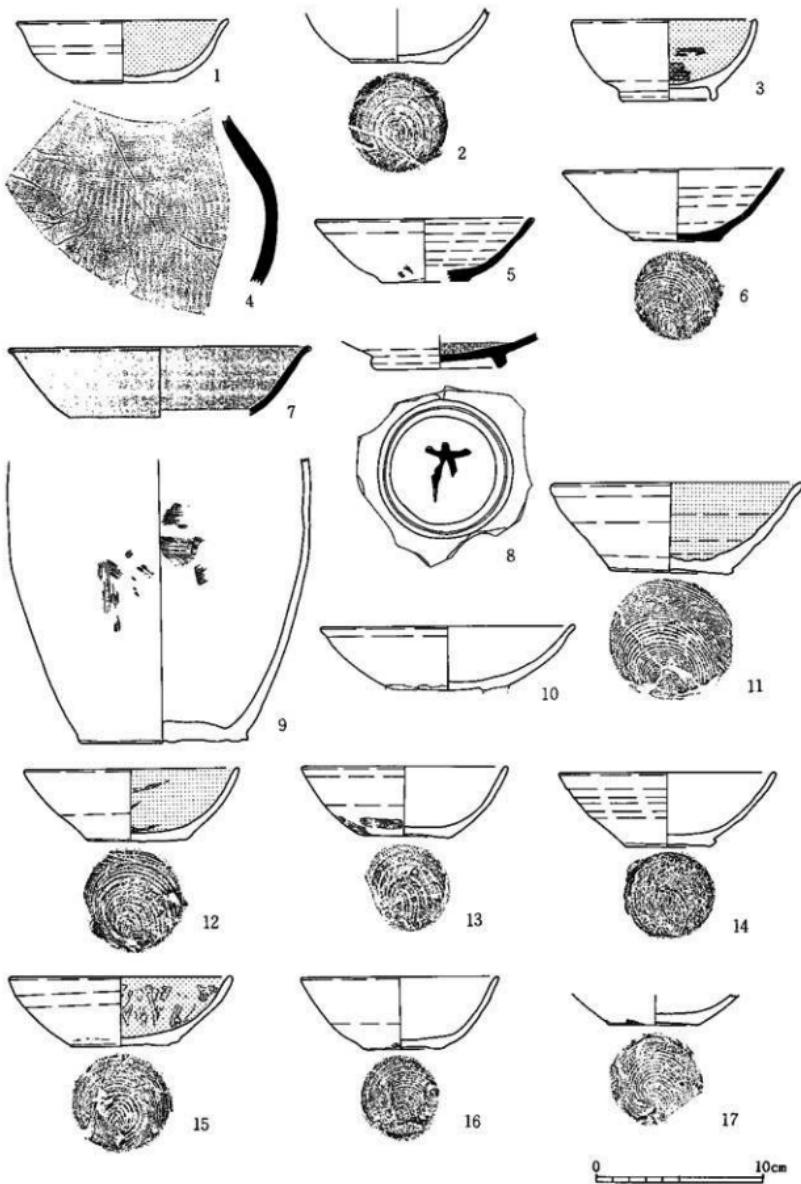
付表5 遺構土層注記(5)・基本層序



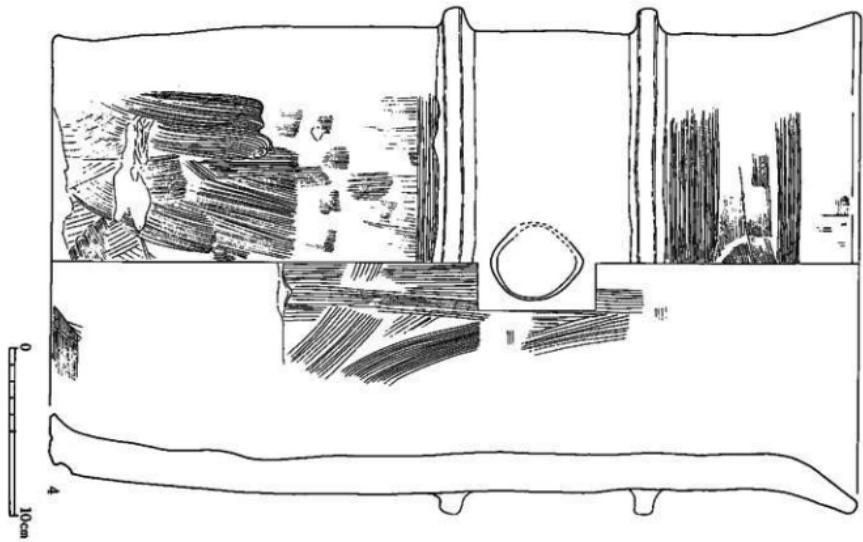
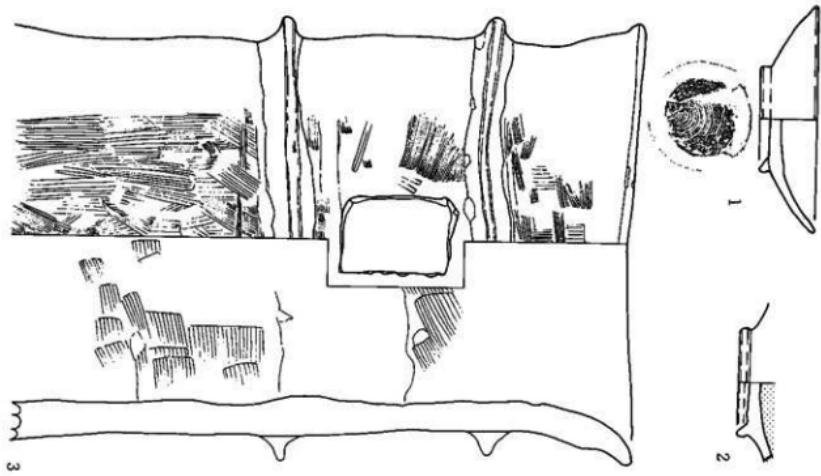
第1図 SB14出土遺物



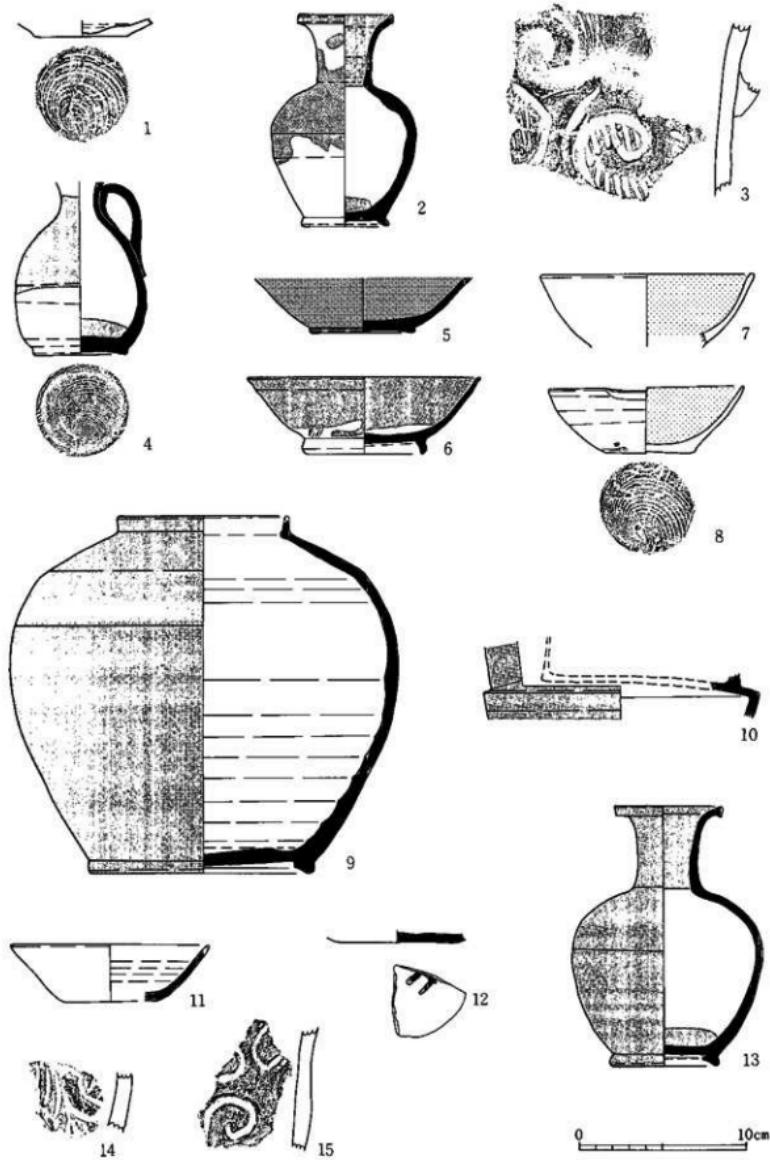
第2図 SB14・23・20出土遺物 (1~9 SB14, 10~14 SB23, 15~19 SB20)



第3図 SB20~22出土遺物 (1~8 SB20, 9~11 SB21, 12~17 SB22)



第4図 SB22出土遺物



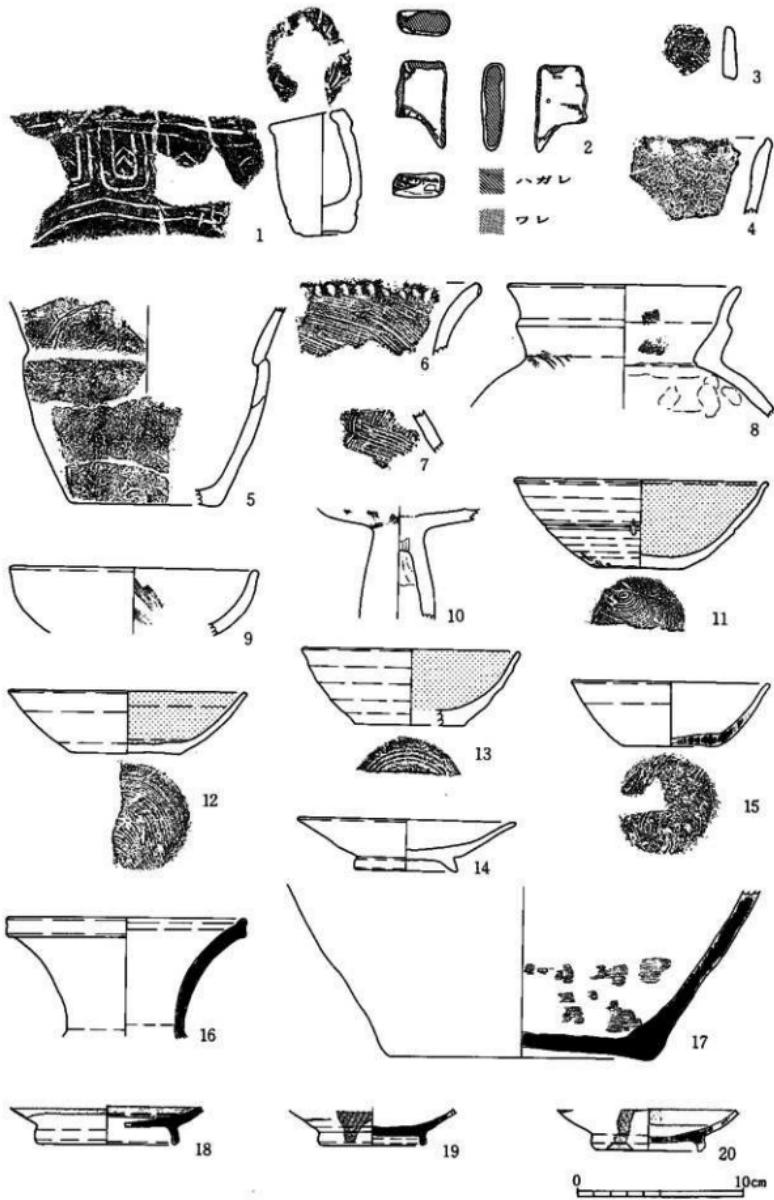
第5図 SK33・34・46・54・56・58・62・63・71出土遺物 (1 SK33, 2 SK34, 3 SK46,
4 SK54, 5 SK56, 6~8 SK58, 9~10 SK62, 11~13 SK63, 14~15 SK71)



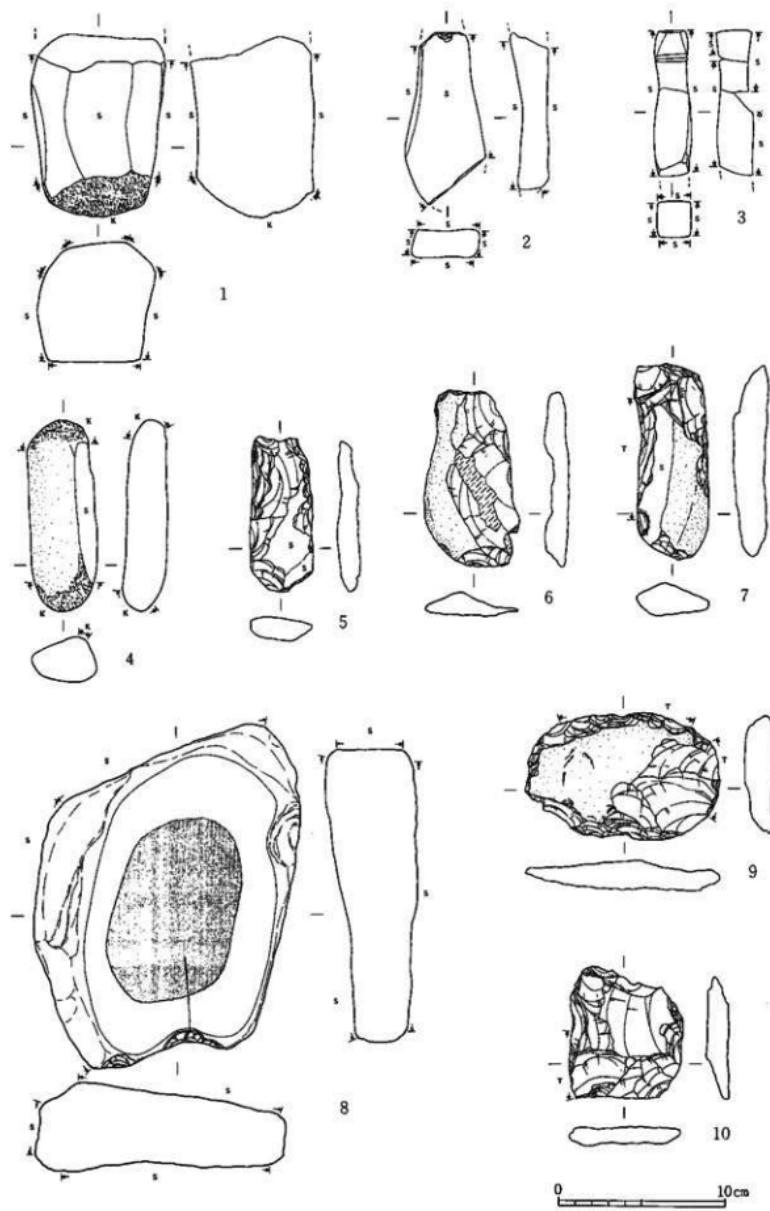
第6図 S 127・31・32、SD04、SX01、遺構外出土遺物
(1・2 S 127、3 S 131、4・5 S 132、6 SD04、7~9 SX01、10~22 遺構外)



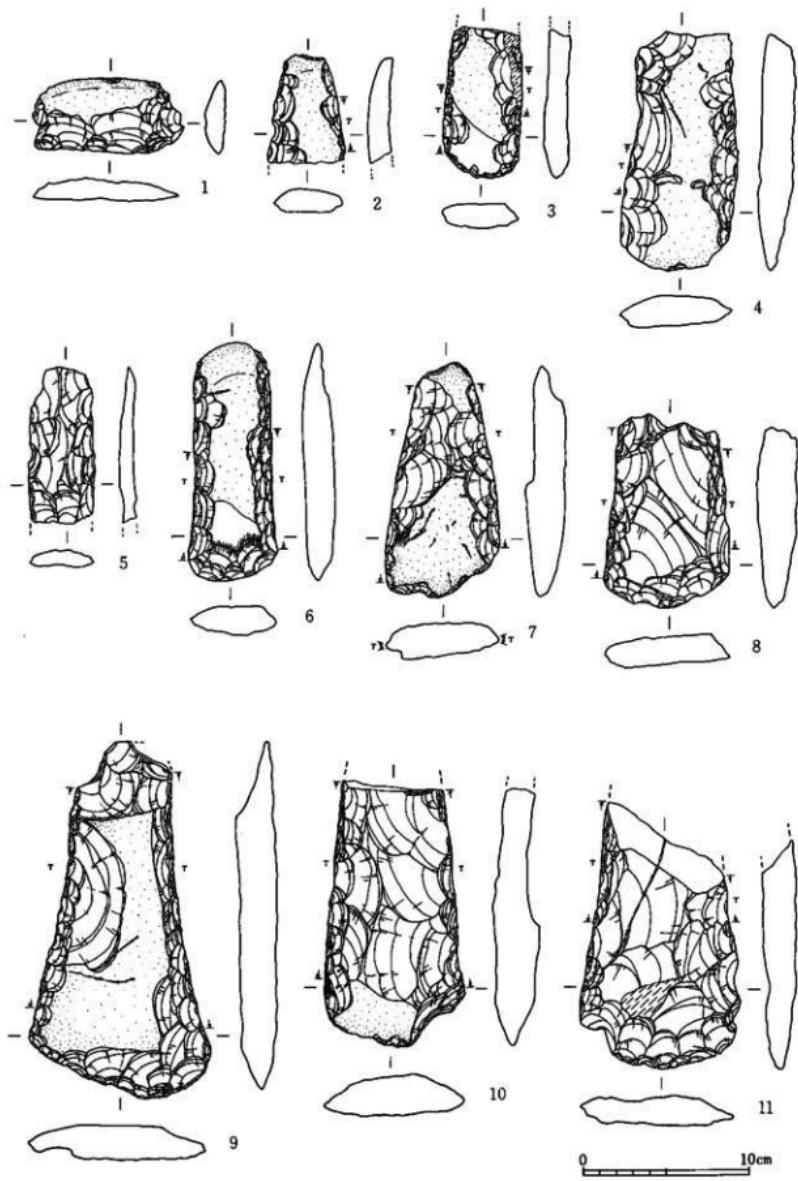
第7図 造構外出土遺物



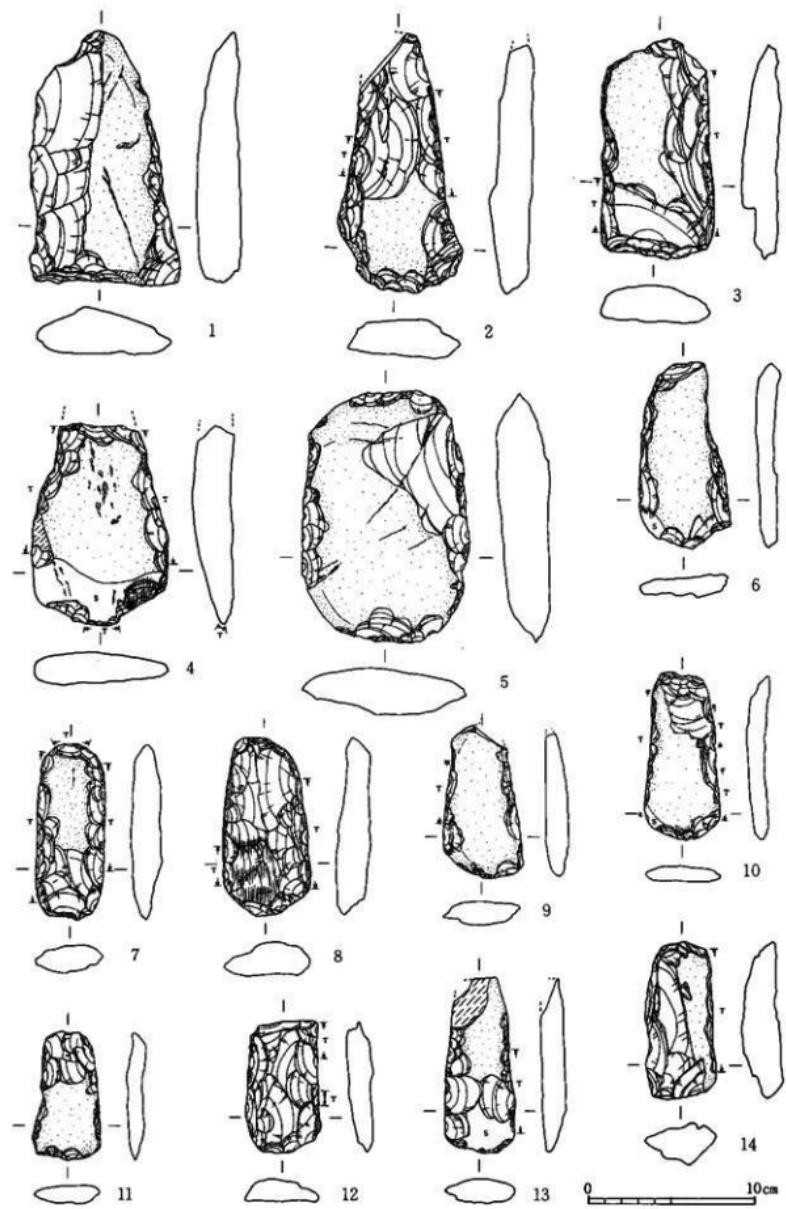
第8図 遺構外出土遺物



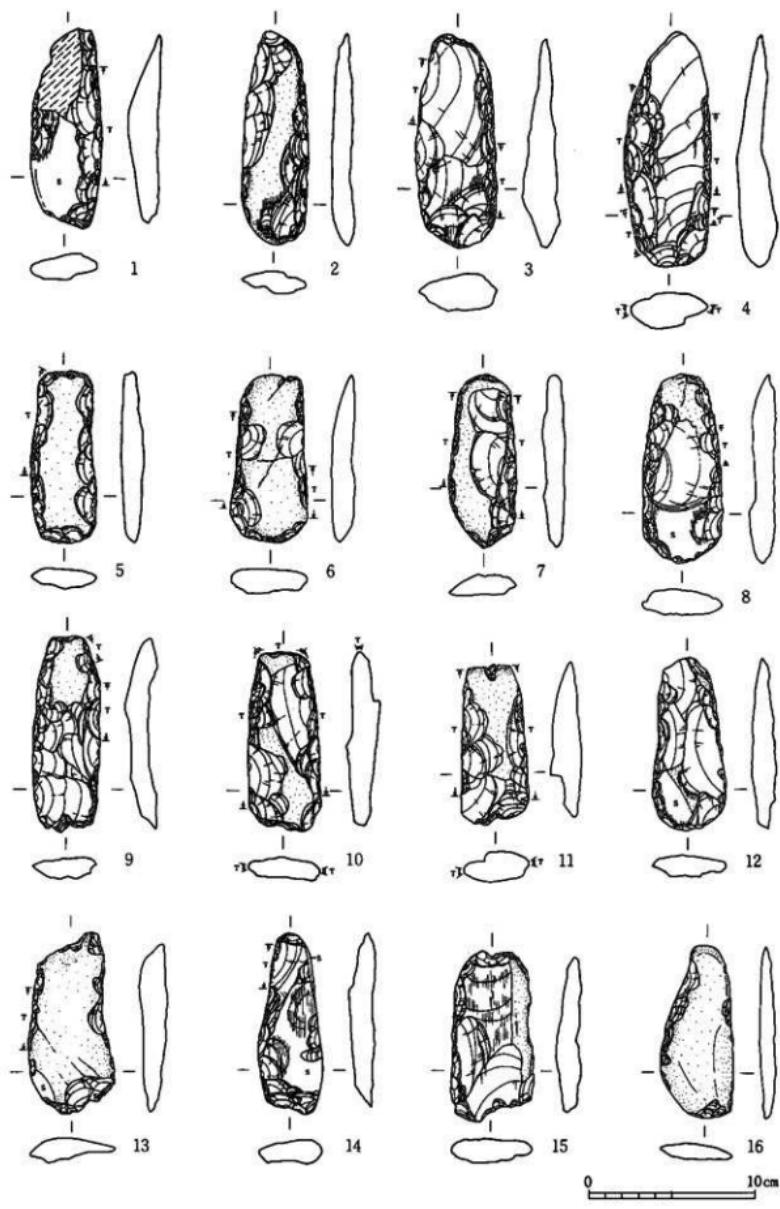
第9図 SB20・22・19、SK41・50・63・65・70・78・84出土遺物(1 SB20、2 SB22、
3 SB19、4 SK41、5 SK50、6 SK63、7 SK65、8 SK70、9 SK78、10 SK84)



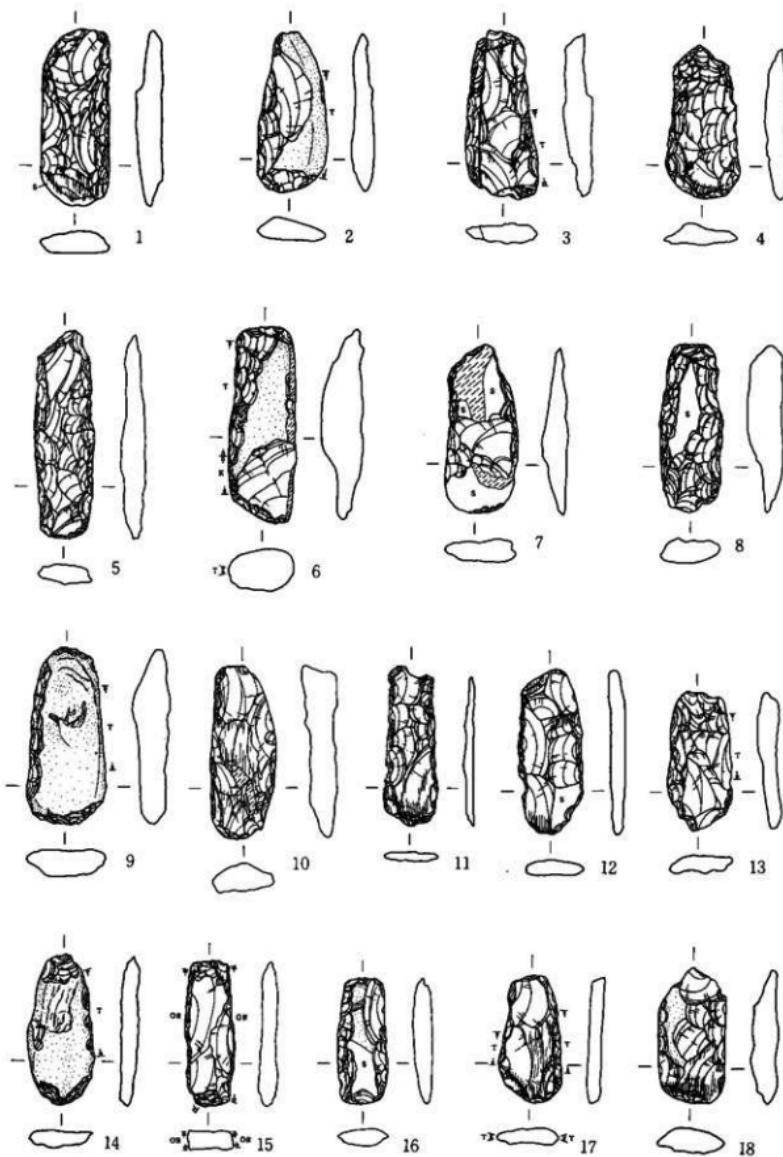
第10図 SK86・87・94、遺構外出土遺物 (1 SK86、2~4 SK87、5 SK94、6~11)



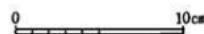
第11図 遺構出土遺物

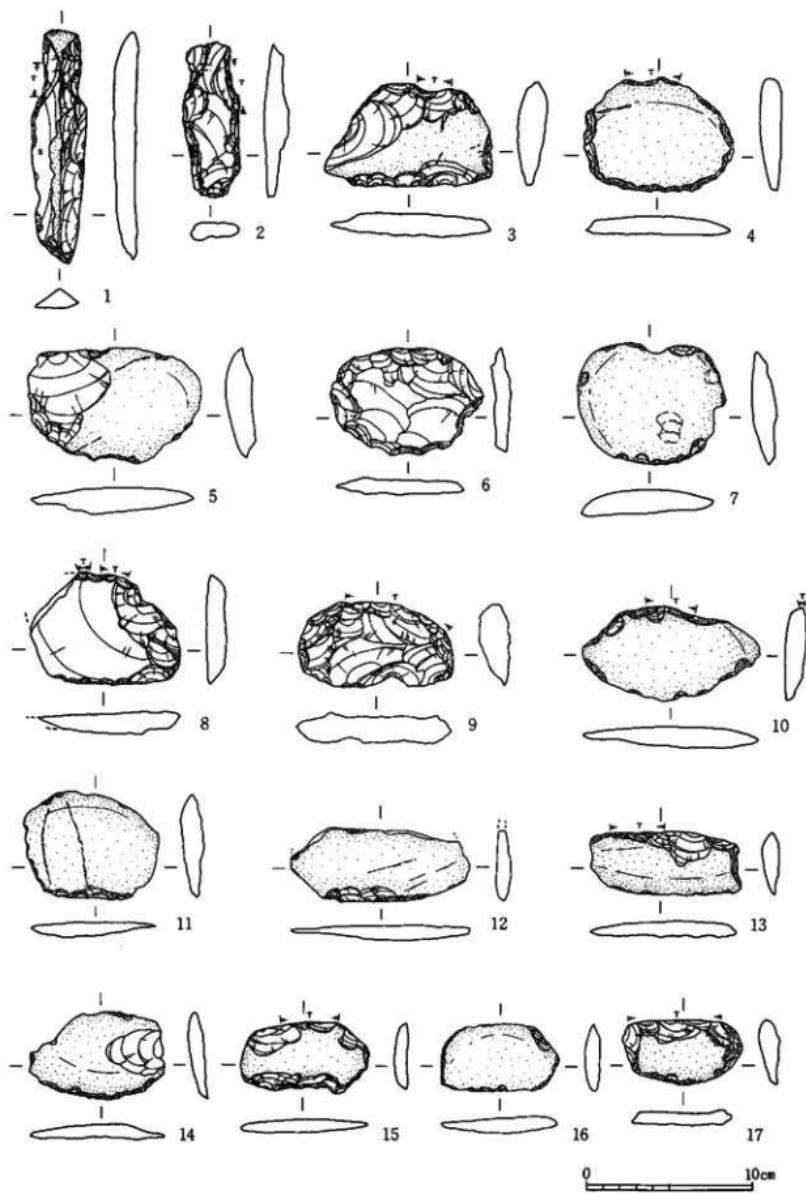


第12図 遺構外出土遺物

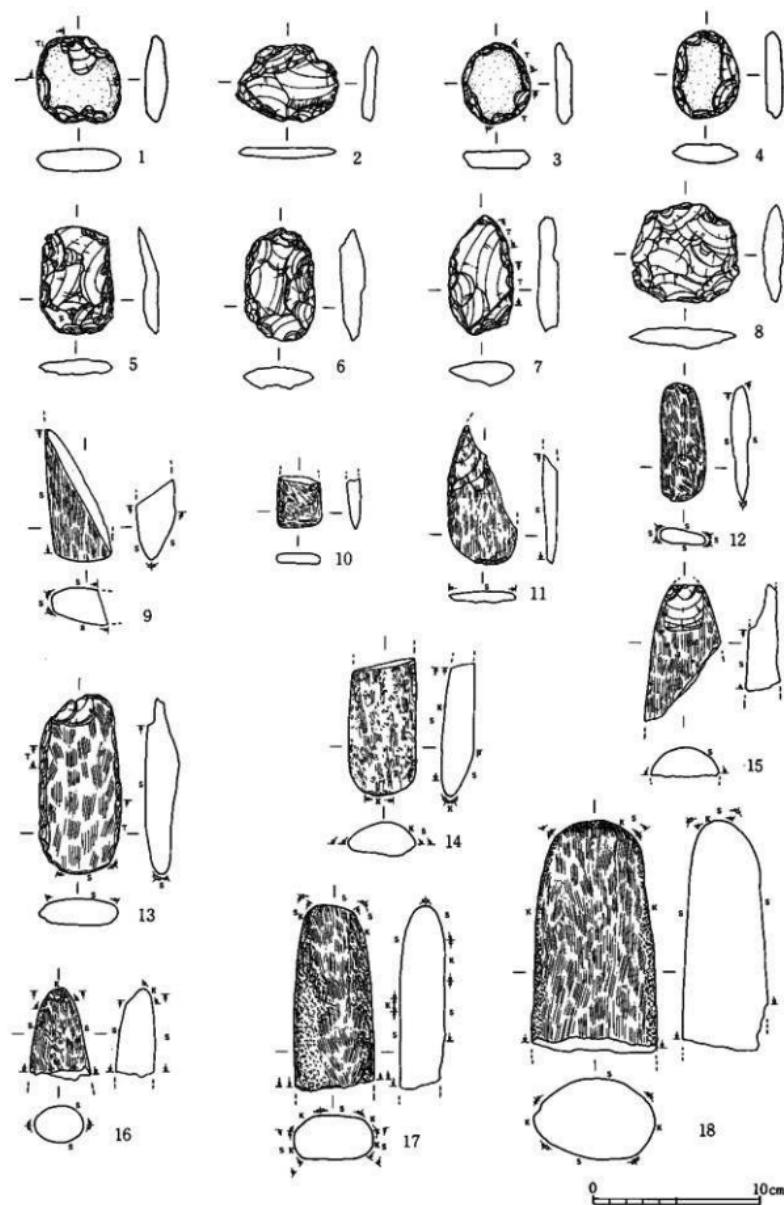


第13図 造構外出土遺物

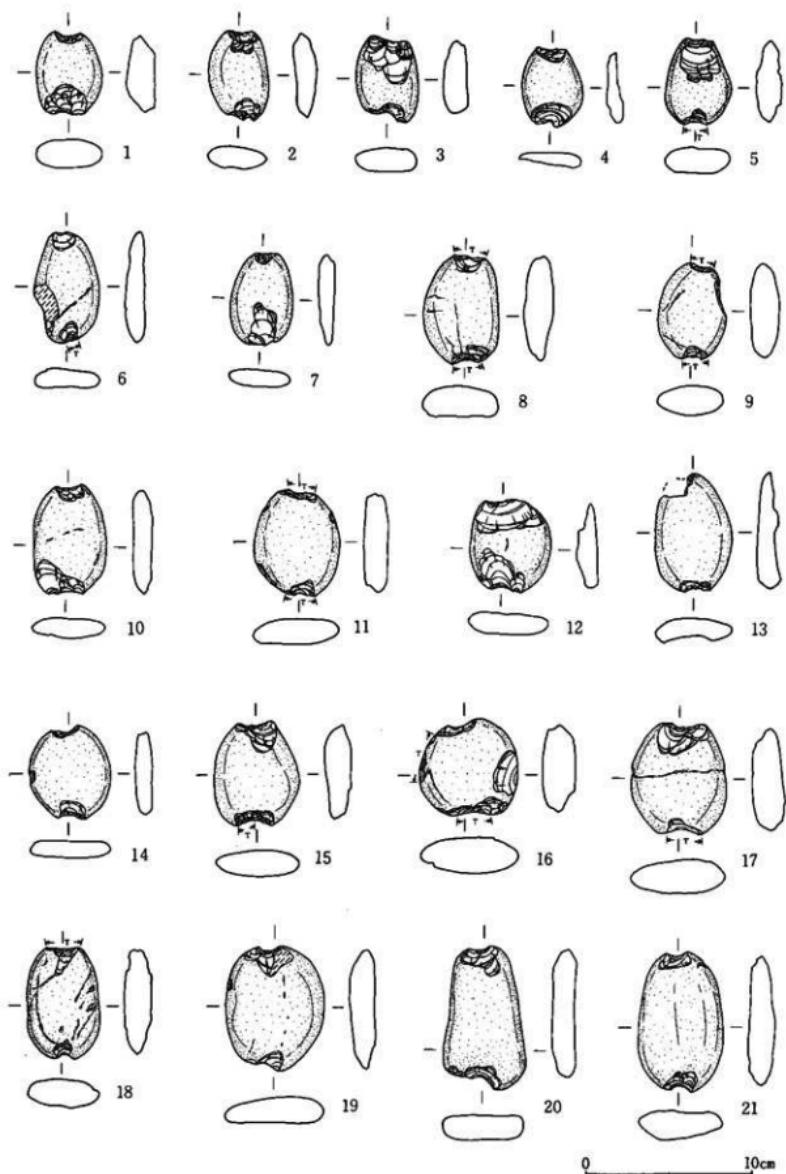




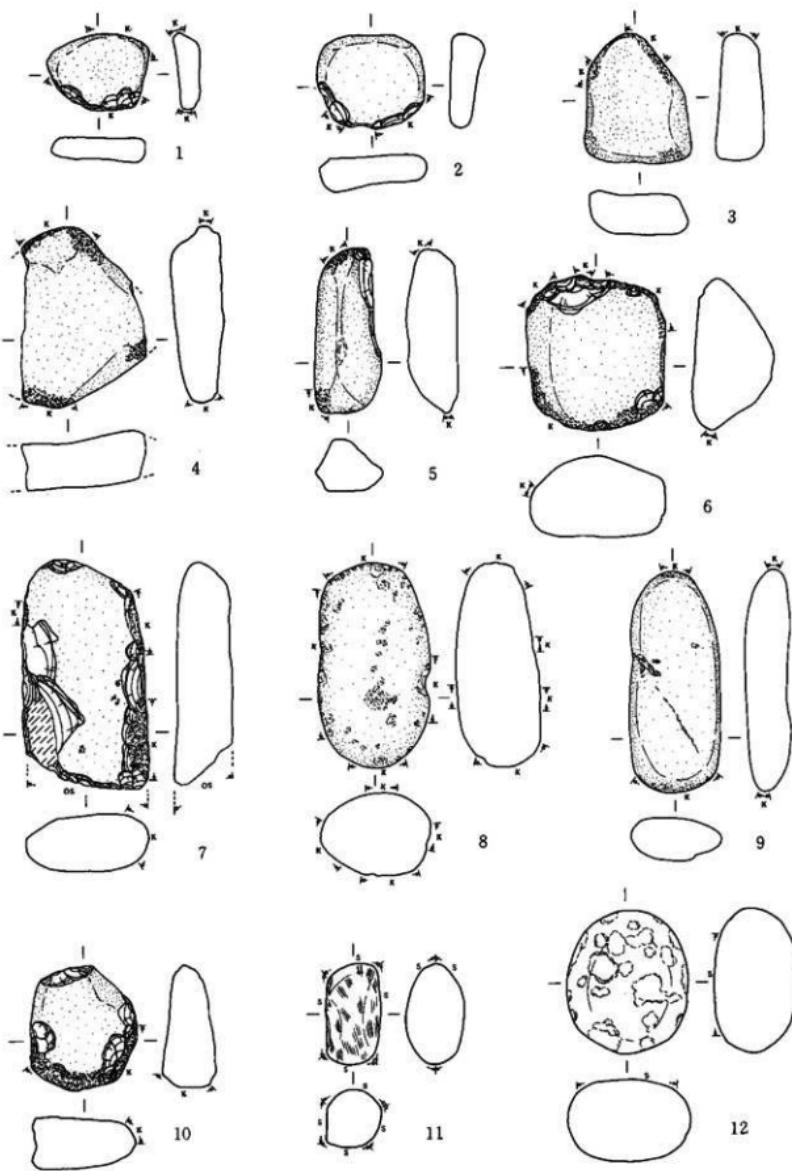
第14図 遺構外出土遺物



第15図 遺構出土遺物



第16図 造構出土遺物

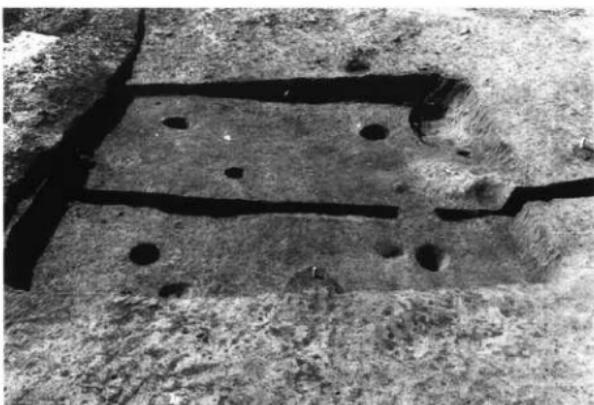


0 10 cm

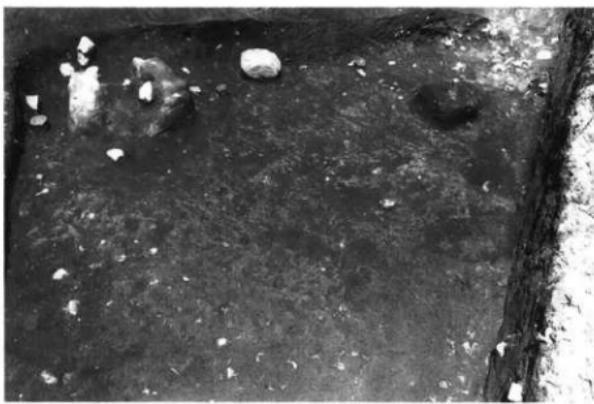
第17図 遺構外出土遺物



第18図 金属製品および埴輪 (1～4 SD04、5 SK33、6 SD07、7・8 遺構外)



S B14



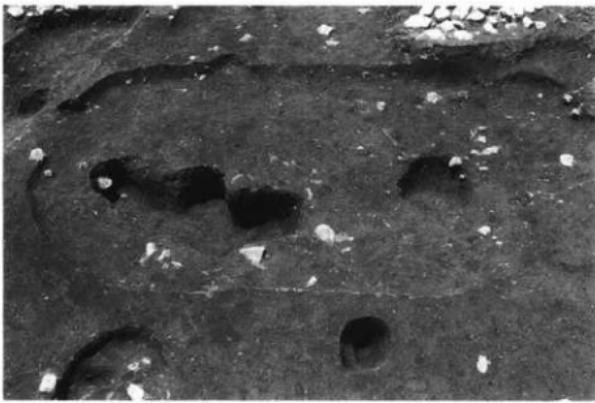
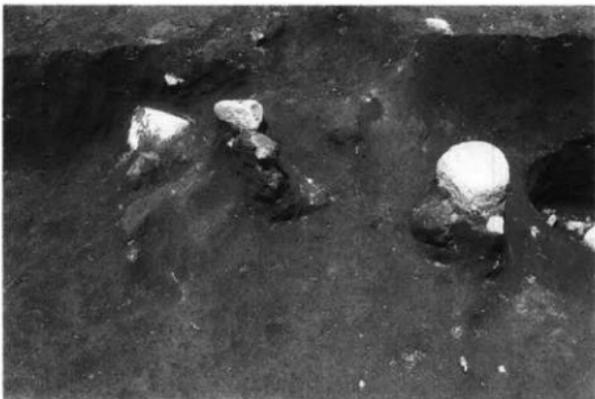
S B20



S B21カマド

図版 2





図版 4



S K34



S K54



S K56



図版 6



S I 33・35~39



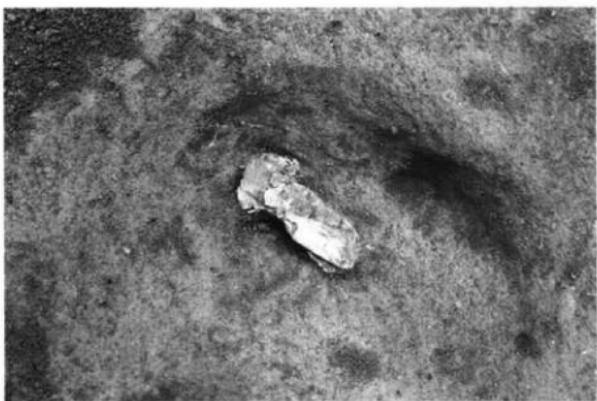
同掘り方



S I 41焼甕集積遺構



SD04北半



同押出仏出土状況



調査区全景

図版 8



重機作業風景



発掘作業風景



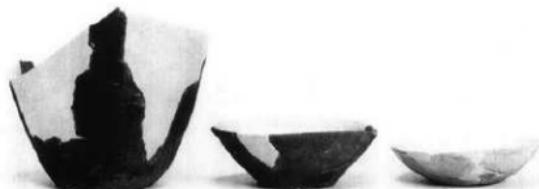
委託基準点設置



S B14



S B20

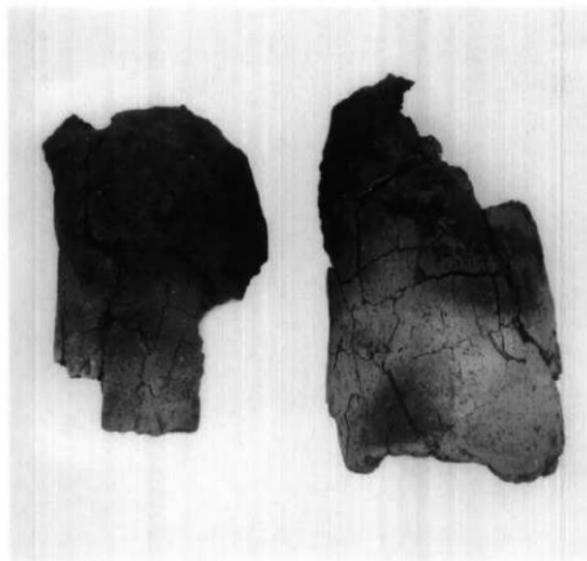


S B21

図版 10



SB22



SB24



SK 34



SK 54



SK 62



SK 63

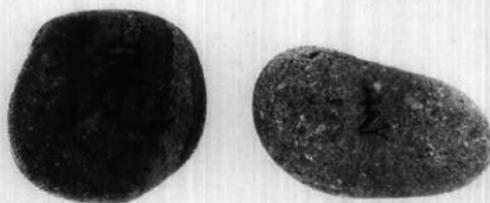
図 版 12



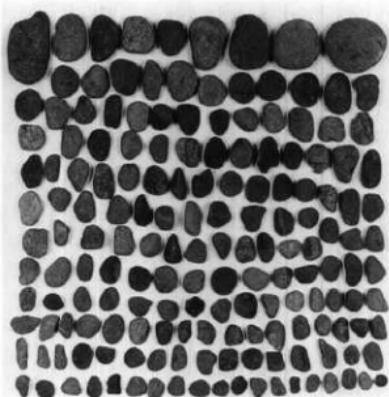
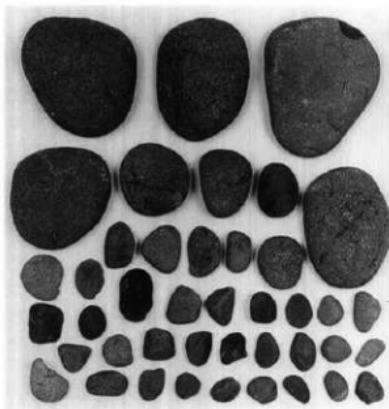
S I 29



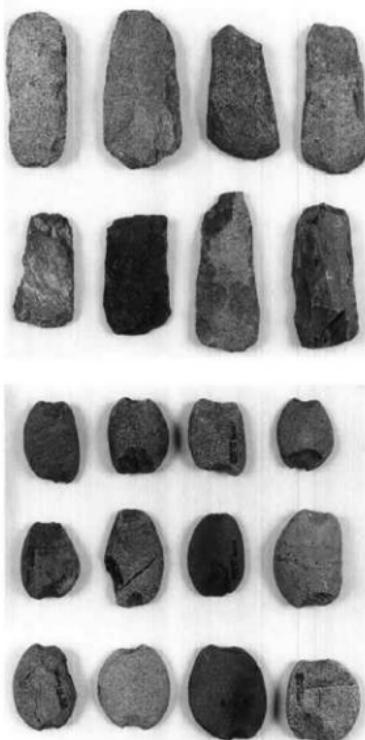
S I 31



S I 32



絆 石



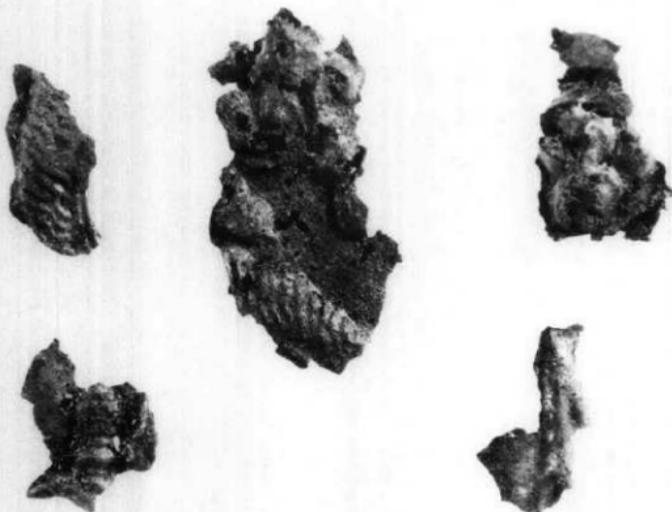
遺構外出土遺物



押出仏（頭部）



押出仏（主尊体部）



押出仏（光背等）



押出仏（小破片）

報告書抄録

ふりがな	あらいばら・いしがょういせき							
書名	新井原・石行遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬場保之							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545							
発行年月日	西暦1999年3月日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²		
あらいばら 新井原・ いしがょういせき 石行遺跡	飯田市座光寺	2053 4809-1他	35° 31' 57"	137° 52' 10"	平成10年 2月5日から 平成10年 6月2日	992m ²	鉄塔建設 ・工事用 道路建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
新井原・石行	集落址	縄文時代 中期 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居址 竪穴 土葬墓 火葬墓 馬墓 その他土坑 集石墓 焼礫集積遺構 その他集石 溝址・溝状址 その他	6棟 6基 4基 6基 2基 61基 17基 1基 6基 10条	縄文時代 土器・石器 古墳時代 土師器 須恵器 平安時代 土師器 須恵器 綠釉陶器 灰釉陶器 押出仏	区画施設と考えられる溝址から押出仏が出土した。同時期の火葬墓群や、古代伊那郡衙との関連等多くの問題を提起した。また、土葬墓の副葬品に優品がある。		

新井原・石行遺跡

1999年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市教育委員会
長野県飯田市上郷飯沼3145

印 刷 龍共印刷株式会社

